

第Ⅱ章 近年における長屋保全活用事例

第Ⅱ章 近年における長屋保全活用事例

1. 様々な活動が展開する長屋2事例

今回の調査では、10年以内（2005年以降）に大阪長屋に新たに入居した14事例の調査を行った。いずれの事例も30代から40代の入居者が主体的に長屋での居住や仕事を営んでおり、14事例中12例は「オープンナガヤ大阪」というオープンハウスイベントに参加している長屋である。オープンナガヤ大阪とは、年に1回、住まいや店舗、アトリエになっている長屋を公開して内覧してもらうオープンハウスイベントであり、近年はテーマに「暮らし開き」を掲げている。

本節では14事例のうちから、異なる地域に立地する2事例を詳細に紹介する。いずれの長屋も住むことと仕事することを長屋内で行っている併用住宅である。1つ目は、飲食店舗兼住まい、2つ目は、設計事務所兼住まいである。家族構成は、子育て世帯、新婚世帯となっている。長屋建物の特徴としては、2階建ての長屋の真ん中のものが1つ、平屋の2軒長屋の片側のものが1つである。

[長屋保全活用事例]

- ・オーガニックなお弁当屋さんと家族の暮らし（大阪市阿倍野区）
- ・平屋の長屋で本棚に囲まれつつ暮らす（大阪市平野区）

事例の紹介頁では、1枚目に写真と文章で当該の長屋暮らしの概要を説明している。2枚目では間取り図とヒアリング調査を元に、1階の平面パースを作成した。4畳半以下の小間が続き間となっている様子、床がつづいている一方、天井から建具までの間に設けられた小壁が室内をゆるやかに区切っている様子がみてとれる。加えて、長屋という限られた面積の中で、仕事や暮らしの様々な活動が多様に展開している様子もみてとれる。

各事例紹介の2枚目、右上の図は平面上での長屋の奥行き方向の抜けを示している。さらに、仕事と住まいを分けている線を明示した。1つ目の事例は、店舗部分と住居部分が1階の表と奥で分かれています、建具と階段で明確に区切られている。しかし、扉を開けると一気につながる。

2つ目の事例は、住まいと仕事場の区切りが移動する事例である。表に設けられた1室にキッチンと寝室がコンパクトに納められ、それ以外の場所は、1室空間となっている。家中を仕事の打ち合わせや友人を招いての食事にも使うこともあれば、表の1室のみ閉じて、ほかをオープンにすることもできる。食事テーブルが、日中は仕事の打ち合わせテーブルになり、夜はリビングとしても使われる。

以上のように、長屋という限られた面積の小さな住まいに、小間とつづき間をうまく使いながら様々な活動が展開されている。

小さな長屋に様々な活動が展開する

オーガニックなお弁当屋さん と 家族の暮らし



4軒長屋の南端にある 大通りと静かな通りの交差点に建つ

通りの雰囲気に着かれて、長屋暮らしをはじめ

この長屋では家族3人が暮らし、オーガニックなお弁当のテイクアウト、ランチ、デリバリーをする。店番は奥さま。料理とデリバリーは店主さん。近所からくるひと、遠方から来るひと、両方のお客さまがいる。長屋の隣は神社で、その雰囲気が気に入ったそうだ。中はボロボロだったが、大通りに面していて店舗兼住宅にできることなど、建物の細かい部分の造りがいいこと、いろいろなことを天秤にかけた結果、こちらに住むことになった。

この長屋の住み心地はとても良く、毎日カフェに住んでいる気持ちだそうだ。神社の秋祭りの実行委員を担当したり、「地域の住民と、よきお店の出会い」をコンセプトに掲げる「バイローカル」というイベントに参加したり、まちと関わりながら、お店と暮らしを育んでいる。

小さな長屋に様々な活動が展開する オーガニックなお弁当屋さんと家族の暮らし



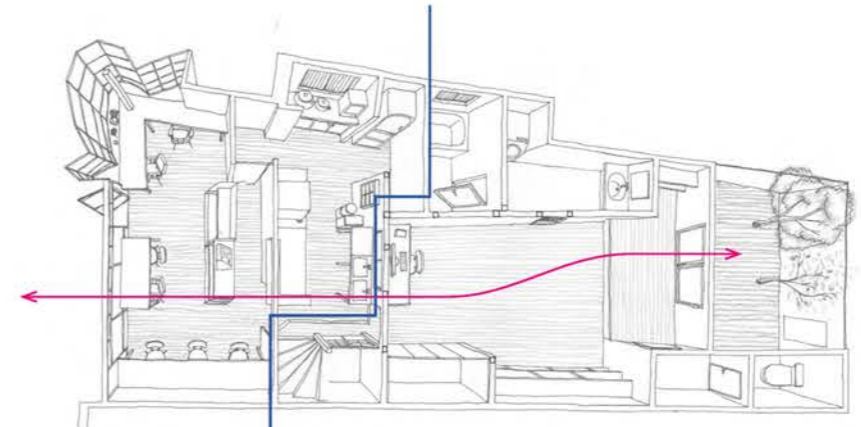
元タバコやだったという長屋を大規模に改修した。4軒長屋の端っこだからこそ魅力がこのコーナー窓に詰まっている。



店舗部分と住宅部分はゆるやかに扉で区切られている。入口から、奥の庭まで見通すことができる。

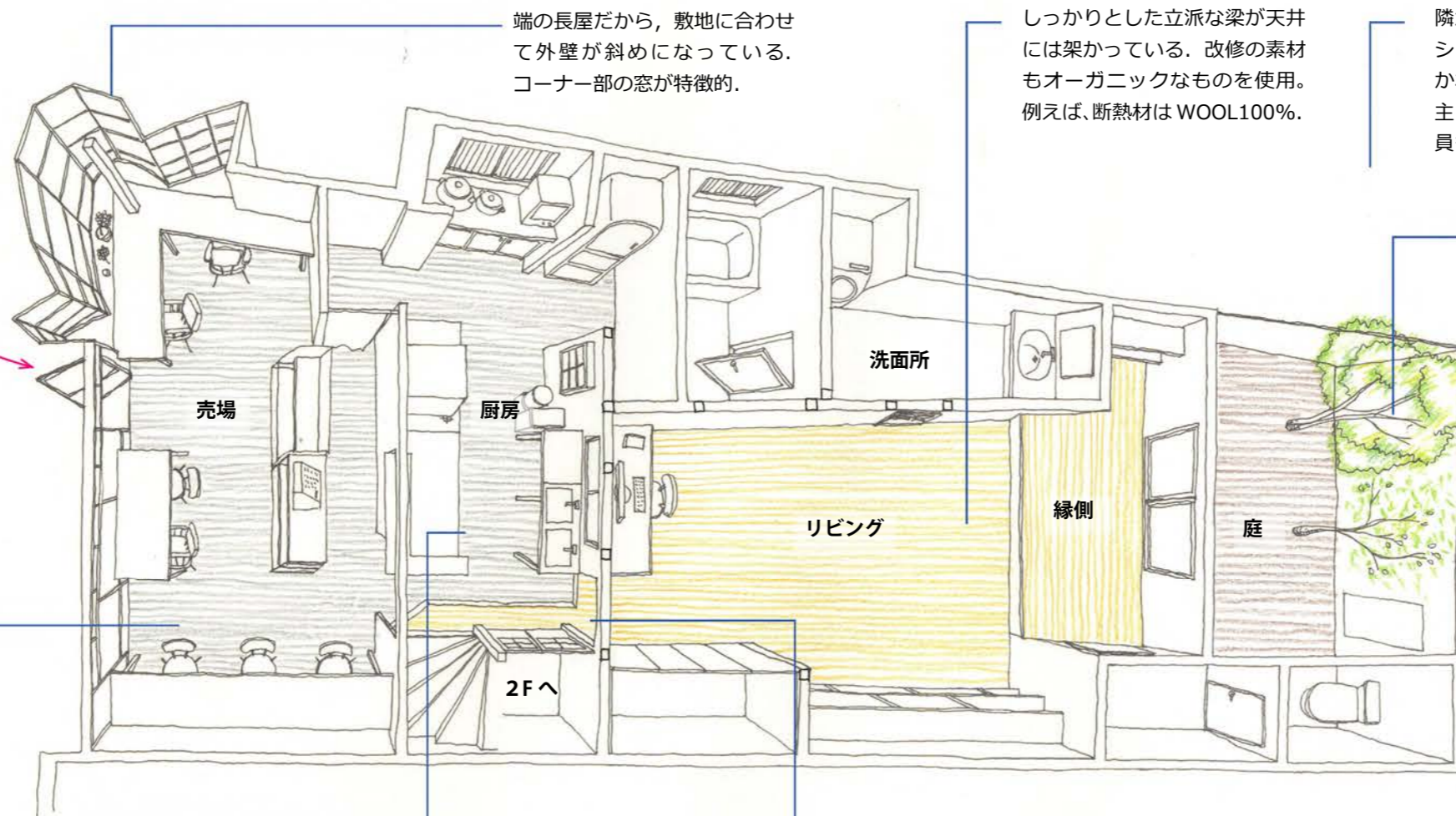


イートインのカウンターからは、まちの様子がよくみえて、心地よい広がりを感じられる。



長手方向に風や視線が抜ける長屋特有の構成をそのまま生かしている。奥行き方向の広がり効果が効果的に感じられる。

靴脱ぎの有無で、お店と家族の場所が、はっきりと分かっている。しかし、引き戸を1枚開ければ、両方がつながる。



端の長屋だから、敷地に合わせて外壁が斜めになっている。コーナー部の窓が特徴的。

しっかりとした立派な梁が天井には架かっている。改修の素材もオーガニックなものを使用。例えば、断熱材はWOOL100%。

隣が神社で雰囲気のあるロケーションが魅力。この雰囲気に惹かれて、この長屋を選んだと店主さん。神社の秋祭りの実行委員もしているという。

店は18時までなので、そこからは家族の時間。庭には、大きな木が1本生えている。長屋のどの場所においても、この明るい庭と緑がみえる。

当初、4軒長屋は全部空いていて、大手メーカーから駐車場にするという話も出ていた。長屋所有者さんがポリシーを持っている人で断っていた。

隣の長屋には店主さんの紹介で昔からの友人のパン屋さんが入った。店舗をさがしていたので、驚かせようと紹介したところ、気に入って入居した。

前は大通り、車の交通量がかなりある。自転車の往来もにぎやか、こんな大通りに住まい兼店舗を構えることができるのが、長屋の魅力のひとつ。

カウンターでのお弁当のテイクアウトと自然食品の販売、大通りを眺めながらのランチ、ベジタリアン・デリやお弁当の配達。コンパクトだが多様に展開。

朝に料理を作って、昼はデリバリーに出かける。夕方に作業することもある。注文にもよるが、夜中から起きているときもある。仕込みは前日の午後に行う。

「美味しい」というのが大事というオーナーさん。美味しく、かつ、健康なオーガニック弁当がここでつくられる。仕込み作業は長時間にわたる。

お店と家族の場所が、この扉で区切られている。靴を履いて作業をする土間=店舗部分。靴を脱いでくつろぐ=住居部分。靴の脱ぎ履きでも分かっている。

お弁当屋さんが入居し、さらに、その知り合いが住むようになり、現在は満室となった。長屋住人と所有者さんとで新年会をすることもあった。

小さな長屋に様々な活動が展開する

平屋の長屋 で 本棚に囲まれて働きつつ暮らす



左手の壁一面が屋根まで本棚 奥に庭がみえる

壁一面に本棚のある長屋

この長屋には設計事務所を開きながら、新婚暮らしを送っているお二人が住む。長屋に住みたいという思いもあり、友人の父が持っている長屋を借りて住みはじめたという。駅近くで家賃が安いのも魅力的だった。結婚を機に、工務店で現場監督をしている奥さんと友人とでリノベーションに取りかかった。こうして、平屋を生かした吹き抜けがあり、一面に本棚が設えられたこの場所ができあがった。

普段は、朝8時か9時ごろに起きだして仕事を始める。ダイニングでご飯を食べたり打ち合わせをしたり、模型をつくったりする。時間によって、まるごと事務所になったり、まるごと自宅になったりする。隣にプライバシーがつつぬけだが、共同体という意識があるので、気にならないそうだ。自分たちが住むことによって、隣が空き家ではないという安心感を隣のタバコ屋のおばあさんに与えることができる。「長屋っておもしろい」と思って暮らしている様子が伝わってくる。

小さな長屋に様々な活動が展開する 平屋の長屋 で 本棚に囲まれて働きつつ暮らす



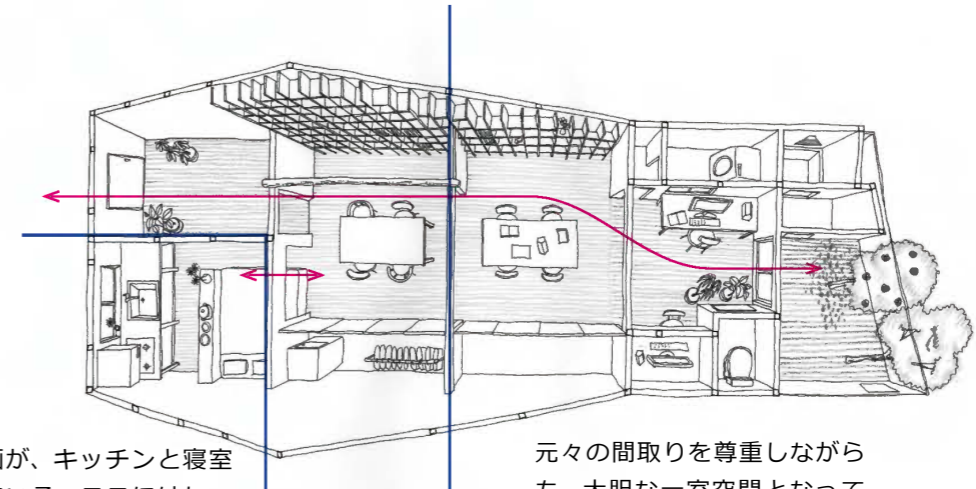
隣はタバコ屋さんだった。今も自動販売機が置いてある。家の前は道路だけど、通行量がなく庭のよう。



植物やソファが置いてある玄関。たいいてい開け放っていて、インターホンがない。



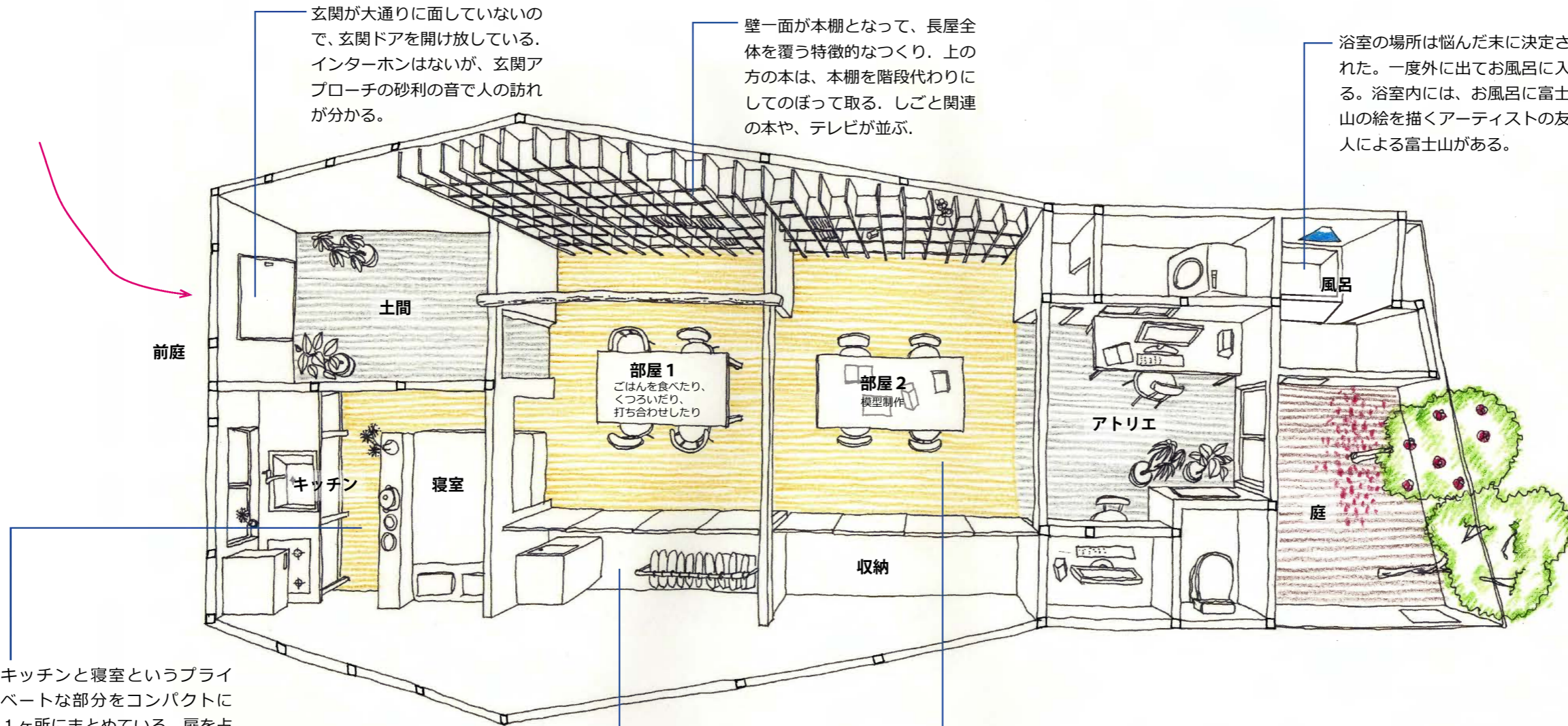
庭にあるお風呂。プレファブのお風呂に、アーティストの友人が富士山を描いてくれた。



表の一面が、キッチンと寝室になっている。ここにはしっかり扉が入っている。変わった組み合わせだが、ここ以外はすべて日中しごと場になる。

通常、夜間は表側のテーブルがダイニング・リビングとなる。

元々の間取りを尊重しながらも、大胆な一室空間となっている。平屋の長屋であることを活かし、天井を取り払って小屋裏をみせている。



キッチンと寝室というプライベートな部分をコンパクトに1ヶ所にまとめている。扉を占めると、しごと場と分けられるが、くつろぐところがない。

この長屋は、住居としてだけでも使えるが、立地がいいので事務所としても便利に使える。たっぷりとした収納がバックヤードとなっている。

改修工事で断熱材を入れたので、熱環境はよい。既存の小壁や袖壁を残しながらも、天井まで吹き抜けた大きな一室空間となっている。

2. 長屋暮らしを語る-1(第2回公開研究会)

第2回公開研究会として、長屋を再生して活用したり、実際に居住されている3名の方に話題提供を頂いた。当日、35名の参加者を得、会場となった豊崎主屋の座敷が満員となる盛況であった。

日 時 : 平成27年7月18日(土) 15:00~17:00頃

会 場 : 豊崎長屋 主屋

テーマ : 「長屋暮らしを語る-1」

話題提供者 :

金野哲哉さん SAORI 豊崎長屋(北区)

伴 現太さん 桃ヶ池長屋(阿倍野区)

参加者 : 35名

①SAORI 豊崎長屋

金野哲哉さん

2015.07.18 大阪長屋居住文化研究会

SAORI 豊崎長屋の金野と申します。よろしくお願ひします。

僕は高校を出た後に、外国人を受け入れてイギリスの福祉活動をサポートする制度を利用してイギリスの福祉に一年半ほど携わり、ガイドヘルパーやソーシャルワークのことを学びました。その後、日本に帰国し大学に通いながら福祉の活動をする中で、さをり織りと出会い、現在の活動に繋がっています。

1968年に城みさをが大阪で始めました。子どもでも大人でも、年齢や障がいなど関係なく、好きに自由に自己表現ができる手織です。

さをりでは失敗や間違いがありません。元厚生労働省の浅野史郎さんや岡本太郎さんなど様々な人達が、「さをり織りは障害の方の感性を出すには素晴らしいものだ」と言ったことをきっかけに、福祉分野にも広がっていきました。今では全国の福祉施設、アメリカやヨーロッパ、東南アジア、中国や香港でも取り入れられています。

SAORI 豊崎長屋は四年ほど前から現在の場所でスタートしました。元々福山の西山さん（ふくやま SAORI 教育研究会会長西山堅太郎氏）という方と竹原先生が知り合いで、竹原先生から「大阪の長屋プロジェクトがあるのでどうですか」という話があり、ちょうどその頃に自分たちも障害の方が活動できる場所を考えていたのでプロジェクトをスタートさせることになりました。

3分ほどの映像にまとめているのでご覧ください。



SAORI 豊崎長屋

(SAORI 豊崎長屋の紹介動画。さをり織り体験の様子など。)

SAORI 豊崎長屋は、障害の方がさをり織りを通して活躍できる場所です。教室は先生がお客さんを指導するのが一般的なスタイルですが、SAORI 豊崎長屋では障害をお持ちの方、例えばダウン症や知的障害、精神障害、身体障害の方現在 13 名が講師となって準備段階から接客、営業活動などを行っています。僕は接客等ではなく、PC などの事務関係や営業部門を担当しています。長屋を拠点に出張体験も行っています。



壁のスペースを活かした収納

長屋を利用するにあたって、広い場所ではないので効果的に使える方法を考えていました。階段下に洗濯機を置いていたのをどけて事務作業の場所にしたたり、押し入れの中に棚を増設して物置にしたりしました。お客さんが来る場所なのでごちゃごちゃしないように。お客さんを気持ちよくお迎えし、スタッフも気持ちよく作業できるよう工夫しました。(スライドで写真を写しながら) お客さんが入ると人と織り機の数が増えていっぱいになりますので。

今日本には外国の方がたくさんいらっしゃいます。ユニバーサルスタジオジャパンや京都や大阪城など人気のある場所だけでなく、中崎町や長屋のある場所を訪れる方もたくさんいます。口コミで長屋のことが伝わって、アメリカやフランス、香港、韓国など色々な国からいらっしゃいます。SNS の効果もありますし、さをり織というのは全国でたくさんの方が体験されていて、その口コミで来客につながることもあります。

長屋の魅力とスタッフの魅力というものがあります。障害の方の特徴を説明するのは難しいですが... 例えば、我々ならば所謂エライ人の前では萎縮してしまうようなところがありますが、障害の方は誰に対しても平等に接することができます。お年寄りや子ども、男性女性、誰に対しても同じように接することができるというのが、障害の方の素晴らしいところだと思います。そういったスタッフの魅力があるからこそ、長屋での活動が上手くいくという確信がありました。もちろん、あるスタッフが話をしすぎてお客さんを困らせてしまうこともあります。その時は別のスタッフが気を使ってやりわり場を和ませ、お客さんと良い対話ができていると思います。

大きすぎず小さすぎず、長屋のちょうど良いスペースだからこそ上手くいくこともあると思います。広すぎず狭すぎないところから生まれる人間関係が一番大事だと思います。

長屋にはたくさんのお客さんが来ますがグループで来る方もあれば、一人二人で来る方もいます。全員友達というわけではありません。知らない方同士がたくさんいらっしゃる時、コミュニケーションの取り方というのは難しいと思います。そういう時、長屋の肩がぶつかるくらいの空間では「すいません」という言葉が生まれます。それをきっかけに織りの最中に「これはいいね」「あれはいいね」と話が膨らみ、人間関係が新しく作られるというのは良い所だと思います。広すぎる場所だと話が出来ないし、狭すぎると窮屈です。長屋の限られた空間がちょうど良いと思います。

今の日本はスマートフォンなどで個人の世界に入りがちだと私は思っているのですが、肩がぶつかる空間で打ち解ける瞬間が大事だと思います。障害の方がやりわり場を和ませてくれるのが絶妙な人間関係であり、この長屋で長く続けられる秘訣だと思います。さをり織り工房は全国にたくさんありますが、障害の方が講師になる体験型工房の例はあまりありません。SAORI 豊崎長屋でモデルケースが一つ出来ているので、全国の長屋や空き家などのスペースを活用し、福祉的の制度を使って、障害の方が活躍出来る場所を作っていきたいと思っています。(SAORI 豊崎長屋の活動を)少しずつ全国の方に伝えていきます。

SAORI 豊崎長屋という拠点があるからこそ、外でのワークショップなどの活動ができ、様々な



肩寄せ合い作業



外国の方をお迎えして



長屋の魅力×スタッフの魅力

告知も行っています。

また、先日「ナガヤサーカス」というイベントを豊崎長屋の主屋で行い、縁のある方々をお招きしました。地域の方や関係者、子ども達が気軽に来て楽しめる場所ができたと思っています。

さおり織りと障害の方ということを踏まえて、社会貢献や、SAORI 豊崎長屋の活動を広めていけたらと思っています。ありがとうございました。



ナガヤサーカス

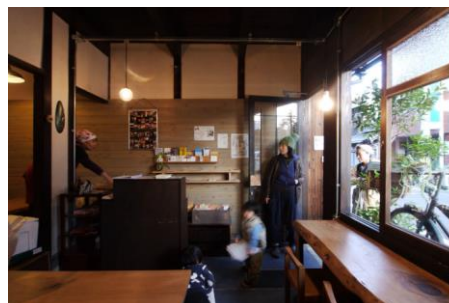
②桃ヶ池長屋（阿倍野区）

伴現太さん

2015.07.18 大阪長屋居住文化研究会

自己紹介をします。阿倍野区の桃ヶ池で長屋に住みながら設計事務所をし、嫁さんがご飯屋さん、母がカスタラを焼いて、3人で長屋を使って暮らしています。私は生まれは大阪で、父が設計事務所をしており、コーポラティブハウスをしている事務所でした。コーポラティブハウスとは一般的に2軒以上で、土地の状態から住まい手の予算や希望に合わせてながら、ゼロからつくっていく、集合住宅の戸建て版みたいなものです。この写真は私の実家ですが10軒のコーポラティブです。皆でつくっていくものなので入居した時にコミュニティができている、そういうメリットもあります。大学は北海道大学で建築を学んだのですが、山ばかり登ってしまして（笑）、卒業後、安藤建設というゼネコンに入りました。ゼネコンでは現場だったので、設計をやりたい思い、今はもうないのですが、ヘキサという設計事務所に転職しました。そこで3年、コーポラティブハウスの設計に携わりながら、その後フリーになり、谷町4丁目で活動を始めました。丁稚場という、緩やかな建築士の集団に加わり仕事をしていました。2007年に事務所を設立して4年前に阿倍野区の桃ヶ池に移転しました。僕がヘキサに入ったとき、事務所では都住創という活動をやっていました。都住創というのは、「都市住宅を自分たちの手で創る会」ということで、天満橋界限で都心にコーポラティブハウスの手法で集合住宅を40年くらい前からつくっていました。今では超高層マンションなど、都心での住まいを選択することは普通にありますが、40年前は、都心は働くところ、住むところは郊外みたいなことが当たり前でした。その当時から都市で住む、便利なところで住む、仕事が近い場所で住む、娯楽が近い場所で住む、という形で都心に住んで、豊かな暮らしをすべきではということで、そういう活動をしていました。僕は実際に都住創の物件には関わっていませんでしたが、そういう事務所で働いていました。

さっきの丁稚場、これは谷町4丁目にある長屋で、僕の長屋暮らしの最初の場所でした。このあたりは、ご存知の方もいるかと思いますが、空堀とか桜がきれいな銅座公園の前の一角など、長屋が残っている場所です。ここで設計活動を行っていましたが、一人で事務所をやりだしてもなかなか横のつながりができにくいので、もとの事務所の友人や他の事務所の方と勉強会や研究会ということをやっていました。ここも仕事を1階でしながら、僕が2階で住んで、1階はシェア



家族と暮らし、働く長屋



コーポラティブハウスの実家



丁稚場

ハウスとして使っていました。

ここから今の暮らし、桃ヶ池長屋の紹介になります。阿倍野区の桃ヶ池町、駅でいうと御堂筋線の昭和町から西田辺の辺りになります。この辺りは昭和一桁台に大大阪といわれた大阪にかなり人が移住してきた時代に、ベットタウンそれも富裕層向けの住宅地として長屋が多く建てられた所です。僕が入る長屋も築 80 数年、昭和 8 年くらいの建築です。当時、僕は谷町 4 丁目です。事務所をしていて、嫁さんも同じ谷町でご飯屋さんをしていましたが、結婚して子供が生まれるという

ことで、それを機にこちらへ移ってきました。というのも、お互いに仕事をしているから、子供が生まれたときにやっぱり仕事への影響があるだろうということで、できるだけ子育てを手伝いながら、という思いがありました。近いところで一緒にフォローしあいながら仕事を続けようということで大きな物件を探していました。

僕は実は“長屋に住みたい”と思っていたわけではなくて、いろいろ探していたら質のいい大きな目の長屋が阿倍野に多く残っていて、富裕層向けにゆったりした長屋がつけられた街ということが歴史的にあったので、そういうものを探したら必然的にここにたどり着いて住みだしたという感じです。

4 軒長屋に、私の設計事務所と嫁さんのご飯屋さん、オーダーメイド服の c o r o m o さん、カフェバーりんどうの花さんと作家ものの器のカタルテさんの 4 軒が入っています。この 4 軒長屋で面白いと思うのが、世代がほとんど一緒で、前後 2 年くらいしか変わらずに移り住み、仕事をしながら住んでいることです。仕事しながら暮らせるという器のヴォリュームがあったので、そういう形で人が集まったということもあるかと思います。4 軒みんな集まったときに、ここで何か楽しいことをしようということで始まったのが「むすびの市」です。年 2 回やっていますが、店主の知り合い、その関係から広がった人たちなど、ものづくりをしている方を呼んで来てやっています。

最近、こういうこだわり市とか何とか市とか結構あるのですが、僕らはここで住んで仕事をして暮らしていますので、イベント的ではなく日常の一部です。肩肘張って「よしやるぞ」という感じではなく、気持ち的には“ソフトボール大会やボーリング大会しよう”くらいの感覚で毎年 2 回集まりながらやっています。そこでお金を儲けようとかも多少はあるでしょうけど、そのときどきが楽しければよいなと思っています。出店していただいた人と繋がって、仕事につながるなどの関係も生まれています。

当初は物珍しさで大量に人が来たのですが、続けていると認知されてきて、最近人は人が緩やか



良質な長屋が残る桃ヶ池周辺



むすびの市



道路ににじみ出すむすびの市

に流れています。「また楽しみにしてきたよ」ということで日常化されてきていると感じます。長屋を使っているのです、屋外に出たら道路です。道が広いということもありますが、道路にはみ出て市をしています。硬い建物の中でやっているのではなく、ハード的にもソフト的にもやわらかい建物なので前に土間空間があることも手伝って、外に勝手にあふれ出てしまう。長屋だけではなく、街中でやっているようなイメージが出ています。

今ではタワーマンションが街にあふれていますが、高層建物と街というのは人の暮らしと乖離しているように思います。自分が低層の長屋で暮らしだすと、長屋は街に住んでいるというか、自分だけではない、そういう心地良さがあります。

最近、土間というのがすごくいいなあと思っています。桃ヶ池長屋にはウチだけではなくても土間空間があります。ワークショップや音楽会、勉強会などいろいろやっています。長屋には人が集まれる空間、場所があります。積層型の集合住宅ではそういうことにはならないと思います。境界が柔らかい長屋であるからこそその良さです。

この街に移り住んで3年くらい経ちますが、この図の円はうちの事務所から1キロ圏内です。ここ3年で仕事をさせてもらった案件です。大きいのも小さいのも含めていろんな相談を受けます。最近、家守とすることばがありますが、まさにそのように、水回りのちょっとしたことから家の設計、ビルの改修まで、何でも相談をしていただきます。街に住みながら仕事するというので、色々な広がりができています。これはそうなるだろうと思っていたわけではありませんでした。もともとは自分の家族がこうなったら、こうして仕事したいなど、思うところから始まりました。

優良な長屋が残っているということもあって、住みながら小さなビジネス、スモールビジネスをする方が非常に増えていて、そういう要望に応えやすいハードが残っている場所だということが重なって仕事できています。うちの長屋は2間ちょっとくらいの間口でそれが4軒並んでいます。長屋は架構が非常に単純です。構造とインフィルが整理されているので時代の変化に対応しやすく、古く痛んでいても木造なので改修が比較的簡単です。きちりしたハードを作れば80年、90年経っても使っていける。都心で飲食店をやっていた方が自分の今の住まいの近いところにUターンしてきて、長屋を使った飲食店を開業された方がいます。良質なものを出してれば、ネット等で広まりお客さんが来てくれる時代なので、阿倍野という環状線から少し離れた場所ですが人が戻ってきているのを感じます。

最近読んだ本で共感を持てるものをあげると、松村秀一さんという東大の先生の「建築—新しい仕事のかたち—」がひとつです。副タイトルに、「箱の時代から場の時代へ」とあります。建築の仕事はもう箱を作るのではなくて場所をどう使うか、ハードを作るのではなく用途をつくる時代であると書いています。「専門性以前に、自ら生活者としてそこで行動する生き様が新しい仕事のあり方」としています。自分に照らし合わせると、建築士という専門性を出してい



土間空間でのワークショップ
化学の実験教室



自宅・事務所1km圏

るというより、普通にこの街で生活してご相談頂いたら今の自分の知識や技術でお応えすると。肩肘張ったものではなく、暮らしの延長での出来事です。

もうひとつが平川克美さんの「小商いのすすめ」です。先程のsmallビジネスの話とも繋がりますが、小さなことが様々なことに繋がっていくということです。社会のいろいろな問題が多様化されて、世界が大きくなりすぎて、遠いところに目を向けがちですが、著者が言うように、「見近なこと、身の回りの小さな問題を引き受けてそれをひとつずつ解決していく」ことが大切だと感じます。

私も嫁さんと子育てをどうしようかと思いながら桃ヶ池長屋に来て、ここに来たからここで楽しいことをしようと、小さいことをコツコツやってきました。振り返ってみるとそれらが積み重なりあって、街が楽しくなる一助になっているのかなと思います。

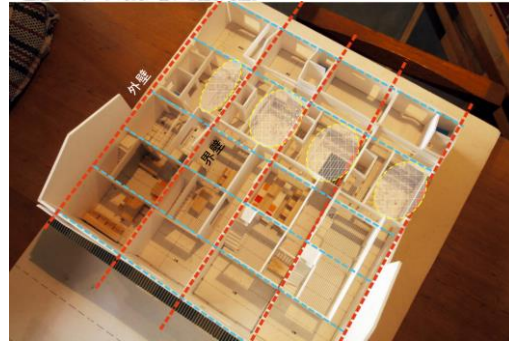
まとめです。谷町で暮らしていたときは都心だったので大きな世界の中にぼつんとしている感じがしていました。でも今は住宅地で普通に生活している人たちがまわりにたくさんいて、ヒューマンスケールというか、自分の頭の中で理解できるレベルの感じで暮らせている、仕事ができるのは非常にいいなあと思います。

これは長屋の良さかなと思うのですが、長屋に住んでいるというより、街にいる、街に住んでいるという感じがします。それはやっぱり土間があって、道路がすぐあっての街との距離感が大きいと思いますが、すぐお隣さんの顔が見えたり、子どもさんの声が聞こえてきたりとか、周りが見える心地よさを感じます。

3つ目は家族のあり方です。今日では、お父さんは家族と離れて仕事に行き、お母さんは子育てに疲れ、おばあさんは遠くに住んでいて、ということがよくあります。僕たちは、僕も仕事をしていて嫁さんも仕事をしていて母も仕事を持っていて、この桃ヶ池長屋で一緒にやっています。そういう生活の仕方をやってみたかったのです。いろいろな家族の形があって良いのですが、こういう暮らし方が豊かなのではないかと考えています。

境界という建築的な話をしましたが「働く、食べる、住む、遊ぶ、飲む、学ぶ」の境界はあいまいで、僕の場合はそれらが繋がっていて、生活している行動が全部一緒です。遊ぶところと学ぶところ、働くところが個別に決まっているのではない。重層的であることが魅力的で豊かな暮らしに繋がる、そしてそれらの人の営みが積み重なり街になると感じます。

- 長屋の構造（桃ヶ池長屋）
- ・開口2階+αの単純な架構・界壁（隔戸壁）柱@半間。部屋内に構造柱が少ない。
- ・スケルトン・インフィル、木造で改修が容易
- ・生活スタイル、時代に合わせ更新可能。



長屋の構造

質疑応答

2015.07.18 大阪長屋居住文化研究会

藤田： ありがとうございます。では質疑応答に移ります。話題提供者お二方のどなたへの質問でも結構です。質問の前にお名前、所属などを言って下さい。いかがでしょう？

小伊藤： 大阪市立大学の小伊藤です。皆さん、長屋の良さを引き出して楽しく暮らしておられるなと思いました。桃ヶ池長屋は何軒か見させていただいて、ほとんど畳の部屋がなくなってフローリングになっているおうちが多かったですよね。

小伊藤： 伴さんのおうちはフローリングですが、畳の方が良かったと思うことはありますか？でも二階は畳ですよね。

伴： そうです、二階は畳です。でも一階は店なので…。

小伊藤： なるほど、ありがとうございます。

藤田： 椅子座か床座か。住生活に非常に核心的な問題でありますね。人によっても文化によっても異なりますね。今、ここで使っている椅子は小池先生のデザインです。座布団が取り外しができて、床座のとき机にすることもできます。他にいかがですか。

松村： 個人で設計事務所をしております、松村と申します。僕もちょっと狭いところで長屋を改装して住んで1年目ですが、僕のところは上下で20坪くらいです。本来なら仕事場も含め一緒にできたらいいなと思っていたのですが、規模的に難しいなと思って。みなさんのところはだいたいどれくらいの広さですか。

伴： 僕のところは30坪ですね。

藤田： 二階はそんなに広くないですよね。敷地で30坪ですか。

伴： 延床ですね。離れもありますし…。まあでも全部大きいですね。僕はここを探す前は谷町で探していたんですけどやっぱりないですよね。小さいのばかりで。あったらお屋敷みたいな物件です。

藤田： 阿倍野の長屋の特徴ですよね。当時のサラリーマン等を対象とした、少し大きめの上質な住宅。一階で、「はこべら」というご飯屋さんをやってカステラ工房があって、厨房がありますよね。そして奥に設計事務所があって坪庭があってそれで、二階で生活してらっしゃると。

伴： 桃ヶ池の四軒長屋では、僕以外はみんな結婚されていませんから、持て余していますね。二階を使っていないとか離れを使っていないとか。

藤田： 伴さんのところは家族でシェアしているんですよね。二軒お隣もお姉さんとちょっとシェアされていますよね。ご飯さんと夜はバーというように時間的にシェアされている。皆でシェアするような暮らし方が桃ヶ池長屋の特徴だなと思います。

藤田： 伴さんのところは「むすびの市」とかがあって、ご近所と趣味や雰囲気が似ているところがあって結び付きが強い印象ですが、金野さんはお隣とかの繋がりはどうですか。

金野： 向かいも隣も裏も結構長く住まわれている一般の方なので、そういう商売をしているのはこちらしかないのでも…。でもスタッフの方が向かいのおばちゃんと猫の話を30分くらいしていたり、飼い犬の話をしていたり、程よくコミュニケーションは取れています。ちょっとものをもらったときはお隣さんに持って行くこともあります。何かイベントやりましょうよって

いうガツガツした感じではなくて、ちょうど良い「猫ちゃん大丈夫ですか」くらいのコミュニケーションが取れている感じがします。

藤田： おすそわけができる感じなのですね。

金野： そうですね。お客さんの中には地方の方もいらっしゃるので、例えば北海道からアスパラを送ってきたらスタッフの方が「ちょっとこれ食べませんか？」って持って行ってそこから話が膨らんでいくというふうに、多分、昔の長屋であったような文化があります。

藤田： 例えばこちらに住んでいる私たちのところの卒業生は、隣のおばあちゃんから時々おすそ分けがあったり、食事に呼ばれたりなど、ちょっとしたことがあるみたいです。長屋暮らしていいですね。いかがでしょうか。

まつもとまり： 私、まつもとまりと申します。船場ビルの314号室でサロン・ド・螺というアートギャラリーをやっています。今は心齋橋大丸のヴォーリスの原画展をやっています。

私もレトロビルとか長屋とか好きなんですけど、元々生まれは南大阪のニュータウンなんです。だから実はこういうところに引っ越したいなと思っているんですけど、ぶっちゃげご予算はおいくらくらいですか。買いはったんですか。今住んでいる家を売って都会の長屋に住むのが夢なんです。職場はそういうレトロビル、大正14年のビルに入れたことはひとつの夢が叶ったんですけど、最後自分が死ぬんやったらこういうところで死にたいなと(笑)。それでご予算のことを聞きたいのと、電気系統のことでブレーカーが落ちるとかよく聞くんですけど…うちの家が築30年なんですけどすぐブレーカーが落ちるんですよ。出はるときは原状復帰しないといけないのでしょうか。

小池： 割と買っている方もいらっしゃいますよね。ですが、賃貸で暮らすっていうのも長屋暮らしの魅力の一つかなと思います。お年寄りの方も賃貸でずっと住み続けられているんですよ。

川上： すみません、今のことで、URサポートの川上と申します。改装費の方は、基本的なところは大家さんがもってくださるとかでしょうか？ 突っ込んだ質問で申し訳ないのですが。

藤田： お金のことはケースバイケースですよ。それぞれのいきさつとかもありますし。

伴： うちの水回りまでやってもらいました。それ以外の中は自分たちで。僕らの時は不動産屋が間に入っていました。原状復帰のことも書いてあったような気もするけど、原状よりは絶対良くなっていますからね(笑)。

まつもとまり： 安く借りてそのまま使うとやはり厳しいのですか。

藤田： それは長屋、状況によりますね。

まつもとまり： 開けてみないとわからないということですね。雨漏りがしたので出ちゃった、という話を聞いたことがあるので…。

藤田： そうですね、住んでみないとわからないことがあると思います。

松村： 耐震補強はされていますか。

伴： 僕はやれるところはやっているけど、評点をいくつまで上げて、というふうにはしていません。

松村： 構造計算がどうこうというレベルではなく、目視でこれはやばいなというものを安心感のあるレベルまで持っていくということですね。

藤田： 耐震補強のことは色んなグレードがあって、これもケースバイケースですね。これしかないっていうのではなく、なるべく安全にしていこうという感じ。人も支え合いますよ

ね。ありがとうございました。それでは他にございませんか。あてさせていただきますね。奈良の今井町からいらした上田さん、ご感想かご質問などあればお願いします。今井町でまちづくりをしておられます。

上田： 奈良の今井町から来ました上田と申します。今井町は伝建地区で大きい町家がたくさんあって近年改修が進んでいるのですが、地域を構成している長屋建も多くあって、しかもその長屋建は江戸時代築のものも多く、老朽化が進んでいます。

私どもはNPOで、4年前から町家の活用に取り組んでいます。町家に比べて長屋の活用がなかなか進まないというのが現状でして、もうちょっと長屋のことを勉強して、より長屋の良さをどう我々が伝えていくかっていうことを私自身も勉強しないと、「長屋もいいですよ」と言っているだけではなかなか良さが伝わっていかないと思って、今回参加させていただきました。

ちょっと不躰な質問なんですけど、長屋で暮らしておられて良かった点を長屋に関心がある人に、一言二言ぐらいで何かメッセージを送るとするとどんなことを伝えたいですか。

藤田： 長屋暮らしの魅力を一言でということですね。色々話していただきましたがまとめてメッセージとしてお伺いしたいと思います。

伴： 先程も少し触れましたが、住んでいるところから飛び出して暮らしている感じ。外と内の境界が曖昧な点です。コーポラティブ住宅もそういう感じはあったけど、もっと広がりました。コーポラティブハウスはそこ十軒の人たちで仲良くしている感じで、そこから飛び出すことはなかったです。さっき和田さんが地に足がついていると仰っていましたが、長屋の低層というところが非常に大きいと思います。

藤田： 私は伴さんのお父さんとお母さんにお世話になってコーポラティブ住宅を作って住んでいるんです。その時にNHKで紹介してもらったとき「現代の長屋」と言われました。現代風の長屋ですけど、外に対しては、ちょっと閉じるかな。

伴： あとはやっぱり立地ですよ。さっきも商いという話がありましたが、広がりができてきました。僕は東淀川区のコーポラティブ住宅に住んでいて、そこはベッドタウンだったのですが、そのまちが好きかと言われればそうでもないです。建物は好きでしたけど。

金野： 僕はあそこに住んではいないのですが、ほぼ住んでいるくらいの時間は過ごしています。一番いいのは、人がいるとか生きているなどというのは大事なことだと思います。周りに人がいる雰囲気があるがたいなと思います。それがあからあの場所にいられるんだなど。

あともう一つは、障がいをもっている方もたくさん来るんですけど、ちょっと精神的に不安定で暴れてしまうような子どもでも、なぜかあの場所だったら滞在できるんですよね。駅とかほかの場所ではすぐ暴れちゃったり緊張したりするような子がなぜか長屋だったら滞在できるっていう、その魅力って何なんだろうと考えると、先ほどおっしゃっていた懐かしいということや過ごしやすいついていうことが自然に形成されている点が長屋のいいところだと思います。

Ohmae： フェイスブックを見て豊中から来たOhmaeといいます。私は昔、長屋的な所に住んでいたことがあるので長屋は懐かしいのですが、今の若い人たちはマンションの様なところで育っている。懐かしさの記憶というのは、どこからくるのだろうか？シャープに勤めていたもので、とんがっていた住宅があって、ああいうのに憧れます。今の子どもが情報過多というのであれば、自己表現のひとつということでしょうか。

安藤（クラニスムストア）： 私ちょっと思うのですが、和室のスケールとか素材に気持ちが安らぐところがあって、懐かしさの感覚になっているのではないのでしょうか。和室のスケールや畳

のモジュールなどですね。

Ohmae : さきほど金野さんがいわれたように、障がいのある方などは、それを嗅ぎ取っているのでしょうか。

金野 : 障がいのある方は、我々より感じる力をはるかに強いと思います。それを上手に発散できないからジャンプしたり叫んだりするのですけれど、長屋ではそれをしなくても自然にしていられるのですね。

藤田 : 皆さん、この部屋懐かしくくないですか？ どこかで見たことあるような気がしません？ “ごちそうさん” の大阪の家のモデルです。番組でこことここが違うな、とか一所懸命探していました。昭和のあの時代の大阪の典型的しもた屋ですね。どこかで見たことがあるとかね。豊崎長屋主屋の吉田さん、一言お願いします。

吉田 (豊崎長屋主屋) : マンションはコンクリートで出来たハコ。いくら内装をやっても感覚的に木造とは違う。この家にしても全部が木。木に対する日本の文化がずっとぶれずにあって、自分の感情として感じておられるのではないかなと、今日のお話を伺って思いました。

藤田 : 須栄広長屋の須谷さん、一言ご感想お願いします。

須谷 : 須栄広長屋オーナーの須谷です。和田さんのお話に共感しました。朝夕の光の移ろいであるとか、木漏れ日であるとか、風が通り抜けるとか、着物の色彩が映えるとか、ですね。

私は長屋のオーナーですが、自分はマンションに住んでいます。マンションは全然季節感がなくて、ベランダに草木をおいたりしているのですが、平面的な感じがします。

昨日、一昨日の台風の時でも、長屋に住んでいたら、すごく風でガタガタして、窓ガラスが揺れたりするのを肌で感じて怖い思いをされたと思います。私は平気で、マンションは平気でしたが、そういう家の息遣いを感じる暮らしは素敵だと思いました。

藤田 : ありがとうございます。今日ご参加の皆さんは、お二方のお話を聞いて、共通点を何か感じられたのではないのでしょうか。

私が思ったのは、お二方皆さんが、社会に対するミッションというか、すごくこだわりを持っておられることです。こだわりがあって、それを皆に認められないとセンスが悪いとなり、受け入れられるとセンスが良い、ということになると私は思っていますが、お二方ともそういう方たちで、アートとかいろいろな能力を持っておられて、それでいろいろな人達とつながっていています。

古い長屋をすごく大切に、居場所を作って周りの人を幸せにしている、ということが共通していると思います。こういう人達をナガヤビトと名付けまして、これを世の中に広めようとしています。皆さんもよろしくご協力ください。

それでは小池先生、まとめをお願いします。

小池 : 大阪市立大学の小池です。豊崎長屋の設計、デザインなどに携わっております。今までは長屋を改修するだけだったのですが、それだけではなくて、住んでいる人の暮らしがすごく面白く素敵だなと、最近感じています。ナガヤビトの素敵なところを分けて貰っています。

この後、学生が夕食会の準備をしてくれています。是非みなさんご参加ください。

藤田 : それでは、本日の公開研究会は終わりたいと思います。ありがとうございました。

以上

3. 長屋暮らしを語る-2 (第5回公開研究会)

開催日：2015年12月21日(月) 15:00-17:00

場 所：あまべ(大正期の大阪式邸宅の貸集会所)

参加者：19名(所属は下表のとおり)

司 会：藤田忍

開 会：UR リンケージ三安康徳

みなさんどうも初めまして。UR リンケージの三安と申します。今こちらにおられる藤田先生と、ただいま大阪長屋居住文化研究会というのをやっております、一応今年度スタートで来年を見据えての長屋の研究会という事で、先生とご一緒させていただいています。それからURの副社長の中田さんと一緒に、あと先生と一緒に研究会を行っております。先般、11月の末に、オープンナガヤが何回目かになると思うんですけども開催していただいて、私も当日参加させていただきました。ちょっと私ぎっくり腰になりまして、おじいさん状態で見学にいきました。翌日からなお悪くなりましたが。

盛況にオープンナガヤは終わったというふうにお聞きしております。この長屋の方で、先生曰く長屋の暮らし、みなさんの貴重な長屋暮らしの体験をオープンナガヤのイベントという事でいろんなお話があるかと思えます。今日はそんな話が聞けるという事で我々も勉強させていただきたいと思えますので、よろしくお願ひします。長屋文化研究会のこちら公開研究会ということで位置づけさせていただいておりますのでよろしくお願ひします。それでは、先生お願ひします。

所属
UR都市再生機構西日本支社
大阪市立住まい情報センター
都島第二工業高校
貸集会場 あまべ
野田まち物語
須栄広長屋
カエルハウス
クラニスムストア
大阪市立大学
URリンケージ

藤田：今日の趣旨ですけれども、今申し上げました通り、公開研究会ということでは5回目。

研究会の3回目は住まい情報センターのホールで不動産屋さんが語るということで、4回目はオープンナガヤ11/29の豊崎の主屋で大家さん、須谷さんに語っていただいて、35,6人ぐらい集まりました。今日は特に何も宣伝せずに長屋の皆さん、実行委員の皆さん中心に集まっていたいて語り合うという形で、気軽に話していただいて、その後打ち上げという感じで。今、長屋暮らしを語り合うということで、話にありましたが、オープンナガヤのことはともかく、今日は私がみなさんに色々質問させていただいて、答えていただくとそういう感じで気軽にやっていきたいと思えます。長屋暮らしを語り合うということだったんですけどもちょっと趣旨を変えまして、長屋人が語るという感じで。

去年の実行委員会の2回目の時に、みんな自己紹介をして、今年のオープンナガヤはこんなことですよという話を一巡しましたら、すごい感動したんですね。それはなぜかということ、素晴らしい人たちがここに集まっているなど。共通性がすごくあって感動したんです。実行委員会をして感動するというのはあまりないですけども、だいたい仕事が増えて嫌だなどという

感じだけでも、このオープンナガヤに関して言いますと毎回面白いんですね。ということで、僕考えました。なぜなのか。みなさんに共通して言えるものはですね、一つにはですね伝統的な長屋、古民家、町家というもの、特に長屋を大切にされている。ひとことで言えば愛している。2つ目はそこに色々な人のための居場所を作る。それは常時開設する居場所もあれば、まちあるきをしてその空間を楽しんでもらうそういう居場所もあります。3つ目はみなさん芸術的な技を持っておられる。それが好きなことだったのがだんだん仕事になって、それでもって空間的な居場所とアートで周りの人に対してよろこびや幸せをおすそ分けしている。主にこのような社会的なミッションというか自分の世界、ポリシーを持っておられる。それはアートで楽しませるのもあれば、福祉というのもある。という4点ほどだいたい共通しているなど感じた。

それで今年、回ってましてクラニスムストアの安藤さんが知り合いで今長屋を改修している人と呼んでいるわけです。オープンナガヤに。来年はお前も参加しろよと広げてくれている。和田さんなんかもブログとかで、みなさんはネットワーカーなんですね。私が頼んでもいないのにネットを作ってつながりを広げてくれているという方達だなあと。これは5点目ですね。もう一つ気がつきました。伴さんところに行ったら、すごく子供さんが元気なんです。自分のお父さんお母さんが周りの人となつがっているんで、自分もつながって隣の人を見えていますし町の外にすぐ飛び出して行っているいろんなことができますし、長屋人の子供は元気なんですよ。これ6点目。

みなさん自分のことを思い出して、これでいいかどうか。ちょっと違うとか、私はもっとこんなことやっていると、あつたら言ってくださいということになります。これはどんな風に長屋暮らしをされているかということになります。それが1つ目で、2つ目はどうやってこういう長屋人になったのか、生い立ち、誰に影響受けたとか、どんなことがあったからとかそういうきっかけや動機、影響を受けた人を、こういうことで今の私はあるということをお話していただきたい。非常に個人情報になりますので、嫌な場合は拒否していただいて結構ですけれども、この研究会というのはのちのち報告書作りますので記録をとらしていただいたり、写真を撮らしていただいたり、これも嫌な場合はぜひ拒否をしてください。長屋人の物語ということで本を書いています。それにも使わせて頂くつもりですのでこれはオフレコとか、何かありましたら行っていただきたいと思います。長屋人としてどうなのか、どうなってきたのかの2点と3点目に打ち上げの時にまた話していただきますけれど、今年のオープンナガヤどうだったか、どんなことがあったかというのを教えていただきたい。すこし紹介していきますね。お名前と所属、どの会場かを。

須谷： こんにちは。須栄広長屋の所有者でございます、須谷と申します。

余部： ここの所有者です。余部（あまべ）と申します。

河合： 西成の天下茶屋でカエルハウスをやっています河合と申します。

吉永： 平野区でヨシナガヤという長屋に住んでます吉永です。

鈴木： ここは玉川で隣の野田で野田まち物語という町紹介をしている鈴木と申します。

河合雅代： 私も天下茶屋のカエルハウスをやっています河合と申します。

藤田： それでは、今私がとても答えやすいやさしい質問を、須谷さんからどうぞ。

須谷： 私のところは長屋を改修してやろうという積極的な考えでは初めはなくて、どんどん人が抜けてしまって、一棟丸々空いてしまった長屋がとてもボロくて崩れてきたら、周辺の人に

迷惑がかかるので壊そうと思ったんです。その長屋は昭和8年に建てられた長屋なんですけれど、住んでいる方がいろいろ改装したりとか改修しながら自分で住んでいらっしやっただので、余計崩れそうになった部分もあり、壊そうと思っていたんですけれども、そこに第1回目のオープンナガヤがあって、そこに参加させていただいた時に、長屋ってすごくこんなに手を入れればすごく素敵になって、新しい人でも住めるようになりました。

私長屋っていうのは年寄りが済むものっていう先入観があって、他にも長屋ちょっと持っているんですけれども、そこにいてる人が年寄りばかりなので、そういう長屋=汚くって、年寄りが住んでいるイメージしかなかったが、でも豊崎の長屋を最初のオープンナガヤで体験した時にすごく生まれ変わるということを、本当にびっくりしたというようなことでした。

それで市大の先生にうちにも崩れそうな長屋がありますという話から、改修していただくという話になりました。やっぱり改修していただくと、本当に建物が喜んでいるというか、本当にやってよかったなど。なるべく、使えるところを残していただくような改修をし、昔の建物ですから、全部自然の素材、土壁や柱の木など生き返るというか、息を吹き返すではないんですけど、綺麗になって、おばあさんが若返った感じになって、家が喜んでいる感じになりました。そこに若い人たちが住んでいただいて、お友達をたくさん呼んでくださって、そこからまた輪が広がって。本当に夢のような感じです。

藤田： きっかけは豊崎ですか。

須谷： そうですね。

藤田： ありがとうございます。そして、自然に長屋人になっていったということですか。

須谷： そうです。はじめはそんな高い志なんかはなかったんですけれど。

藤田： ご専門は。住宅ですか。

須谷： 全然何も。そういう建築のこととか、住居のこととか、昔の住まいだということは全然勉強をしたことはないですし、祖母から話を聞くくらいでした。

藤田： 子供の頃から、あそこに住んでおられたんですか。

須谷： いえ。長屋に実際に住んでいたことはなくて、所有しているだけです。

藤田： ありがとうございます。では、こんな感じで。次、余部さん。

余部： 私はここで生まれて育ちました。小学校の2年生まではここに住んでいました。西宮に引っ越しすることになった時に、ここを潰すのはもったいないからと、貸会場にしたのは50年以上前からそういう形にしています。

その当時西宮に引っ越しするわけですが、西宮で設計してくださった方が、ここを改修、貸会場にするのに少し改修をしたんですけれど、その方もあまり大々的に改修せずに、このままの状態。そこから当時はもうそんな時代ですから、景気がよかった時代で、夜の宴会でお貸しすることがほとんどで、週半分ぐらいはそういう形でお貸ししたりしていました。

だんだん不景気になってきて宴会を外ですするというのは、年に数回お貸しするというのはずっと続いてたんですが、父母が亡くなってから、私その頃からだんだんこういうこの良さがわかってきました。私も先ほど先生がおっしゃっていたように、陶芸家が本職のつもりでやっています。ものづくりなので、大体こういう古いものはいいなという感じで。私の個展をきっかけにまた、新しくということはないんですけれども、いろんなことで使っていただいたらいいなということで、それまでものを置いてあれていたんですけれども、また整理してできるだけ部屋の中も昔のままに戻そうと。私あんまり改装するのは好きじゃないんで、家は建った時

のままでいいっていうのがありまして、できるだけオリジナルに戻すという形で使っていたらなという気持ちです。

藤田： ありがとうございます。余部さんは長屋路地アートでしたっけ。豊崎で。

余部： 豊崎も何回か参加させてもらっています。

藤田： オープンナガヤ始める前ですね。来ていただいてその時に色々お話をして。それで今年、野田まち物語の田中さんの紹介で再開したということ。

余部： そうですね。昔市大の方がアンケートをポストに投函していただいて、それにちょっと答えさせてもらったのがきっかけで、参加させてもらったり、学生さんがここでイベントに使ったり。

藤田： そうですか。誰でしたっけ。

余部： 俣野さんです。

藤田： 俣野くんね。いま須谷さんの家に住んでいる俣野くんね。

須谷： そうです。

余部： その前に私のところに電話があって、長屋空いてませんかと。

藤田： それで須谷さんとこ空いていたんで、彼は東京に行っていたんですけど、帰ってきて。

須谷： 一昨年ですね。

余部： 何年か前イベントされた時は外でギター弾いてはりました。

藤田： 私のところの研究室で、長屋の調査をしたんですけど。はい。ありがとうございます。では、河合さんお願いします。

河合： 天下茶屋でカエルハウスをしています。僕、長屋に住んだことはないんですけど、持ち主で、オヤジなんかから天下茶屋に長屋あるけれども、子供の時家賃もらいに行ったりして、くれなかつたりいかに大変かというふうに聞かされていて、ようやく人が出て行ったもんですから、壊すって言ってたんです。

屋根が落ちそうになって、これは壊そうってなってて見積もってもらったら壊すだけでも300万円かかると。それだったらそのお金でなんか面白いことができないかというのが始まりだったんです。それで屋根をコロニアルという一番安物で葺き替えて電気も一応引き換えて、水道も使えるようにしてそこから始まりなんですね。

それが3年ぐらい前で、それでいろいろ住人を探していて、そのころは長屋がこんなに盛り上がりつつある前、前夜って感じで情報もないしそれで、どうしたものかと思ったらクラニズムストアの安藤さんからこんなやつってるよ、参加せえへんというお声をかけていただきまして、それが第3回目のオープンナガヤでそれからどんどん人が集まっていったという感じです。それで、もともとうちのに住んでた人が、改造して一つ一つの部屋に小メーターをつけてアパート経営みたいにしてたんです。ちょうど今回やる目的にぴったり合っていて、そのまま使ってるっていう段階なんですけど。たくましいな、西成の人はって、すごいなあと。もう自分でやり直すのはお金ないんで、ほって出て行ったんですけども。

余部： 契約違反じゃ。

河合： ですよ。すごいバイタリティだ。そういうふうにして、9部屋ぐらいあるんですけど、物を作るような若い人を応援していくようなアトリエを、6か8畳ぐらいですけど、今は物を作るような人、8人に借りていただいているんですけど。まあ若い人なもんですから、真壁になっているのを大壁にしてしまっただけ全部ペンキ塗ってしまっただけで真っ白になって

障子とか欄間とかあったのを全部外してしまって、ペンキ塗ってしまうんでちょっと残念な気はするんですけど。

さっき須谷さんがおっしゃったようにみなさんいてくれるとどんどん賑わいが出てきて本当に死んでたようなところが活気が出てきて本当にやってよかったなと思ってるんですけど。これからは借りている人がどうしても土日しか使わない人が多いもんですから、それをどうしていくかという課題もあるんですけど。今のところみんな楽しくやってる。住人同士が友達なったり、まあやってよかったなという感じですね。

藤田： そんな感じで。そうすると潰そうと思っていた長屋が潰すお金が大変で改修をしたところ自然に今のシェアアトリエといった形になって、どうしようかなというときに3回目のオープンナガヤのときに5人埋まっちゃったという、これはいいわということでやってこられたという。だいたいみなさん意識してというより自然になんかこう長屋を生き帰らせる喜びを感じてやってこられてる。そんなかんじですね。それで河合さんは写真家ですよ。

河合： そうです。建築の写真を撮ってます。

藤田： 建築が多いですか。というふうにアートの技を持っておられるんですね。それでシェアアトリエということで広げられて、居場所を提供してみなさんを幸せにしているという。

河合： そんな大げさな。

藤田： いえいえ。では河合雅代さんいかがですか。

河合雅代： そうですね。やはり、思ってもない出会いですよ。ジャムを作る方が来られたりとか、額縁を作る方が来られたりとかやっぱり自分が普通にしていたら絶対に出会わない人たちと出会えて、その専門の話を聞けたりとか、なんか自分自身も豊かになった気がします。

藤田： 建物の持つ力が思いもよらぬ人との出会いを作ってくれたと。

河合雅代： テイラーさんもいたりして、洋服のことを聞いたりとか。

藤田： ということですよ。建物だけ良くなって使われなかったら。そこに人が来て思いもよらぬ出会いがあるということですね。私もそうですね。豊崎で関わってオープンナガヤをすることによって、みなさんと知り合えて、最終的に人が幸せになるのは人と人との出会いですね。

はい。ありがとうございます。それでは今年新人の吉永さん。

吉永： 吉永です。平野区で長屋を借りていまして、7年ぐらい前から借りていたんですけど、そこで改修もせずそこで寝て設計事務所やっているんですけどそこで寝て生活も7年間ぐらい続けていたんですけども、去年結婚したという機会、リノベーション、改修をして住んで事務所としています。名前が吉永っていうんですけど、ヨシナガヤって言ってまして、まず最初に結婚する前に「ヨシ、ナガヤ」と思いつきまして改修しようとおもって、私設計しているんで普段は新築とか改修とかしているんですけど、長屋にすごく思い入れがあるとか興味があるとかまったくなく、たまたま住んでいるところが長屋で「ヨシ、ナガヤ」ってひらめいて、改修を始めた。もちろんお金もなかったんで、「はやい、やすい、うまい」のヨシナガヤ、吉野家じゃなくてヨシナガヤ。ということとか吉永さんの家ということでヨシナガヤなんですけれど、良い長屋ってことでヨシナガヤとも言っている。いろいろ気づいていけばとなりのおばあちゃんすごく優しいとか、近所のコミュニティがまだ残っているとか、気がつけばすごくいろんなことが面白くなってきまして、ヨシナガヤと名付けて今も住んでいるところです。オープンナガヤには河合さんに声をかけていただいて参加させていただいたところです。

その2日間で100人前後きていただいて、面白かったなとおもっています。建築ってよくよ

く新築を作ってオープンハウスってしているんですけど、だいたい同業で建築設計の方で、みんなシャツ着てジャケット着て同じメガネかけたような人が来るんですけど、今回オープンナガヤってそうじゃなくていろんな学生さんもきたりとか、近所のおばちゃんとか、全然知らん人とか、紛れ込んで、どんな形で知られたかわからないんですがいろんな方が来られて、話をする機会があって、すごくこの、家を、長屋を開くというのはすごく面白いことだなと思いました。なんか仕事やめましてとか、人生相談とかされたりとか、4時間ぐらいコーヒー1杯でいたりとか。なんかすごく長いこといってはった人もいますし、建築に興味ない方がたまたま来られて、すごく面白いですねとか、こんななんなんですかとか、いろんな方に来ていただいたのが、面白かったなと思っています。それでやっぱり、長屋という古さも新しさもあると思いますし、後感じたのは、物語があるのが長屋かなと思ってまして、新築で作ってもあまり意図がなかったりとかあるんですけど、長屋って全部説明ができるんですよ。これがなんで残したか、ここは昔トイレだったんですよとか、ここは、とか全ての建築の部分に対して何か、物語があるんですよ。それがすごく面白いなと思ってまして。だからこっちも話をするのが楽しく、だいたい同じこというんですけど、それぞれにストーリーがあって、それってできてから70年80年間の物語があるから、今もそれ以降物語が続いてるんだなと思って、それが長屋の魅力かなと思ってまして。そういう形で今年オープンナガヤに参加させてもらってすごく私自身も楽しかったかなと思ってます。

藤田： 須谷さん、うんうんと。

須谷： ええもう、話したら止まらないんですね。きていただいて、いいですねとおっしゃっていただくと、そうでしょうか、自分がやったかのような喜びで、ここはこうでね、ここは昭和8年の壁でねとか私生きてないのに。なんかもうすごく嬉しくなります。

藤田： 話すと嬉しくなる長屋。ありがとうございます。吉永さんのところは、本棚の壁が登れますね。

吉永： あれもお隣さんの音の問題でそういうことしてて、なんでというのが全て説明できる、全部物語がある。やっぱ隣のおばあさんのチーンってなる仏壇叩く音で目が覚めてたとか、逆に新婚で生活しだして迷惑かけてもよくないなとか、そういうこともありますし、全てにこう面白おかしく、いろんなことが話できるなというのがやっぱりいいなと。

藤田： 音が聞こえるという問題点、長屋の弱点問題点を逆手にとって、面白いインテリアにしているという。そういう感じですね。では、クラニスムストアの安藤さん。

安藤： 住吉区で家具店と設計事務所をしております。今日は主人も子供も来ているんですけども、私たち二人とも東北の出身で、2011年に震災があって大阪に引っ越してきました、その年の秋に住吉の墨江小学校の前に古い長屋ではない1戸建ての建物に住むことになりました。

藤田： それは蔵じゃなかった。

安藤： 蔵ではなかった。クラニスムの屋号の蔵というのは、東北の時に住んでいたのが蔵だったんで、クラニスムという屋号がそこから始まっているんです。そういうわけで、昔から古い建物とか、古いものが好きで、暮らしてきたんです。

まず古い家具を販売するという家具店からスタートしました。結構お客さんのニーズとしては、古いのをそのまま買う人もいるんですが、修理してほしいだったり、この形に作ってほしいというニーズがすごく多くて、そこから工房が必要ということになったんですね。工房は音を出すんでなかなか最初に住んでいた家では、関係的に作るのが難しかったんでちょっと違う

物件を探して、その時に河合さんのカエルハウスさんとかも候補になりつつ、いろいろ物件探しをしている中で、今の長屋にたどり着きました。

そこは2軒長屋なんですけれども、片方は住まい、片方は工房として中を自分たちで改装しながら使える状態にしていこうと。たまたま長屋を探してたってわけじゃなくて、音を出すということがあって、周りに空き地があるところを探してまして、隣に音の迷惑をかけたくないなあというのがあって、駐車場があるような空間がたまたま今のなんですね。

それが2013年の春に見つかって、改装は秋までかかって、その年のオープンナガヤに始めて参加させてもらって、その途中段階だったんですけども一応見てもらいました。仕事は家具だったり、内装だったりすることをちょこちょこやってまして、家具店ということではいろんなイベントの出展とかもしてまして、例えば、桃ヶ池長屋の4軒でも春にむすびの市というのがやっているんですけども、それに出展させてもらっていたり、内装やらしてもらっているところも古い長屋が結構多くて、割と住みだした長屋と関係性がよくわからないんですけども仕事も結構そういう長屋が、深いつながりがいろいろできてきました。そういう影響が結構あるのかなと思いつつ、今2,3年目で住みながら、長屋のお仕事が結構多いですね。

藤田： オープンナガヤに参加されたのは、どんなきっかけでしたか。

安藤： 2013年に初めて参加する前に、見学という形でFacebookか何かでオープンナガヤってイベントがあるのを知りました。

藤田： そうですか。

安藤： はい。阿倍野とかその辺りの長屋を見て回ったりして、そのイベント自体は知ってしまって、たまたま長屋に住むことになって、小池先生の方からこういう催しがあるんで、参加してみませんかということでお声がけしていただいて参加することにしました。

藤田： たんぽぽの和田さんは誘ったんですか。

安藤： そうですね。自分たちが初めて参加する2013年の時に河合さんもそうですし、自分の周りには長屋の方、コンフィさんとかうさ舎さん、あとグラードさん。

藤田： 全部安藤さんが誘った。

安藤： 一応長屋だったなという人には。住吉区でポツンと自分たちだけ参加するよりは、何軒か回れるような方がきっといいだろうと思って。

藤田： それは知ってて。

安藤： はい。元々知り合いで。

藤田： それは自分たちがいろいろ探しながら知り合いになった。こちらに来られてから。

安藤： はい。来てから、お店やっていく中でお客さんとしてきてもらったり。

藤田： 家具作ってもらったり、売ったりとか。

安藤： そうですね。

藤田： なるほどね。仕事をしたり、友達になって意気投合して、長屋人だなんて。

安藤： そうですね。たまたま長屋でしたからねってことで。

藤田： ネットワーカーですね。桃ヶ池に行かれたのは。

安藤： 桃ヶ池もカタルテさんという器のお店の方がお客さんとして、うちのお店にきてもらったのをきっかけに、出てみませんかと声をかけてもらって、そこから交流が始まりました。

藤田： そうですか。小池先生、伴さんがいることを知って、誘ったんですよね。桃ヶ池、オープンナガヤには。

小池： 私、全然記憶がないので多分違うと思います。

藤田： 誰かなあ。伴さんがいることを知って桃ヶ池をオープンナガヤに誘った。

安藤： 私たちよりも前から参加されていて。

藤田： それが、桃ヶ池と重なったということですね。

安藤： はい。

藤田： ネットワーカーができています。桃ヶ池は桃ヶ池で春むすび、秋むすびっていう、マーケットをしていますね。

安藤： そうですね。あそこはそれぞれが不定期にオープンしているので、その日はみんなが開けているという状態を作るために年に2回そういう催しをしています。

藤田： そんなにバラバラですか。

安藤： そうなんです。カタルテさんは月に何回かしかオープンしていない。

藤田： そうなんですか。それを一緒にやるということで、春むすび、秋むすびをやりと、近畿圏を中心に大体20店舗くらい、集まりますね。いろんなお店がね、雑貨屋さんや自然農法でお米作っている人とか、いろいろね。

伴さんと私は伴さんのお父さん、お母さんにお世話になってコーポラティブ住宅を作りまして、それがテレビで紹介される時は現代の長屋という風に紹介されます。鉄筋コンクリートで共同住宅ですけどね。その雰囲気そんな感じということで、NHK が紹介してくれたんですけども。伴さんってあの伴さんの息子？って、世の中狭い、悪いことできないなど。ということで強力なネットワーカーの安藤英寿さん。一言。

安藤英寿： 思いがけず長屋に住むことになったんですけども、長屋暮らしからしたら私たちは邪道だと思うんですけども、2軒長屋で2軒丸ごとお借りしています。ちょっと変わった戸建てに住んでいるという感覚かもしれないです。まあそのオープンナガヤと言うものに参加させていただいて、他の長屋の使い方というものも知って行って、長屋というのが非常に魅力的だなあというのを再認識しました。

藤田： ずいぶんとくさんの方を誘っていただいて、広がったっていう。いろんなところで安藤さんが。堺のアカリ珈琲に行くと安藤さんに誘われていますと。安藤友美さんは会津木綿を使った、雑貨をととても素敵なおしゃれな可愛い雑貨を作られるというアートなことをやっておられる。吉永さんは建築をデザインしておられる。それ以外にありますか。

吉永： うちはお風呂に富士山が描かれています。私が描いたんじゃないですけど、家のお風呂に富士山を描く画家の友達がいてまして、フロンティアという。もともと長屋なんで私の家はオリジナルの姿ではお風呂はなく、銭湯使っていました。私借りた時はプレハブのお風呂があったんですけど屋根が取れていて雨がザーザーになるお風呂でした。

今回、改修するにあたってそのお風呂は新しく作りかえて、そこに権田直博さんという画家さんに富士山の絵を描いていただいて、銭湯の名残ではないですけども毎日のお風呂を楽しめるようにしました。

藤田： モダンな富士山のアート。ぜひお風呂に入りに行ってください。タダです。

安藤： タイルですか。

吉永： いえ、パネルにペンキで富士山描いて。

鈴木： 藤田先生が長屋人とおっしゃいましたが、私は案内人やいっております。生まれも育ちも福島で、今野田に住んでおりますけれども、震災で焼けていないので長屋も大きなお屋敷

もたくさんありました。昔ですよ。過去ですけれども。案内するには十分たくさんあったんですけれども、ここ近年、みんな潰されてもう後は案内するには写真を見せては、こうでしたという風な案内の仕方になっています。

それでも戦災にあってないのでお地藏さんもたくさん残ってまして、その案内もさせてもらってまして、この間33人くらい案内したり、そのようなことを楽しくやっております。

オープンナガヤに参加したきっかけは藤田先生にちょっと参加しないかということで、2回目の時でしたか、1回目はバスの見学で雨がすごかったからおりて歩けないのでやめた。まあそんなんで長屋は上手に利用されてるのを何箇所か案内してよかったなと思ってますけれども野田の長屋もぎょうさんあったんですが、まあ所有者がどう改築しようが潰そうが、そういうご時世ですからね、どんどん変わってきています。

それでもまあよかったかなと思っています。他のところよりは参加数は少ないですけど、まち歩きなので案内するにあたって、多少、建築の話もしなあかんのかなあと自分なりに勉強したり、これが明治の建物ですよ、これは大正の建物ですよというような知識は多少持っています。

藤田： すごくお詳しい。私より詳しい。

鈴木： それでちょうど、100年ぐらい経つお屋敷ですけども、そこはまさに更地になるところが介護施設になったんですね。多少耐震強度も補強せなあかんので、小池先生に一回行ってもろたと思うんですけども、古い建物で、そこは認知症の介護施設になっています。

今、どこでもぎょうさんできてるのはコンクリートの箱、そういう介護施設の中でなんと温かみのあるものか。私はそこで理事させてもらってまして、昨日もそこで餅つきしまして自分から地域的には楽しくさせてもらっております。

オープンナガヤに参加するのにちょっと私は合わないんじゃないかと思っているんですけども。田中というのが代表で、余部さんに一回声掛けよかということで、そういう形で参加していただいたんではないかと考えています。

藤田： 貢献していただいております。何年ぐらいでしたっけ。最初に鈴木さんに野田のまちあるきをしていただいたのは、3,4年前に大阪の地域SNS、「大阪本音つと」というのがありました。2000人ぐらいメンバーがいたんじゃないかな。それでオフ会を時々やりまして、その一つが野田のまちあるきで、その担当のスタッフが企画してくれて鈴木さんにご案内いただいて10人ぐらいいましたかね。結構たくさんいて。

鈴木： 寒い時期でしたね。

藤田： 2月でした。私寒い時にはまちあるきはできないんじゃないかと思ってたんですが大丈夫でしたね。歩くとポカポカしてきてですね、むしろ夏の方がだめです。まちあるきどころではない。冬の方がいいです。

それで野田のまちというのはすごいいろいろ残っていて、長屋の博物館のように、明治、大正、昭和と。意匠がですね、これは昭和の1桁ぐらいの大阪の時代の長屋で青銅の箱軒がありますと。盛んにそれをみんなに説明しています。明治時代の特徴、敷地の高さとかですね。細かいデザインや部材、材料に関してのことを含めて詳しく並んでる。ここからここは明治で、ここからは大正でと教えてくれるんです。

ですからオープンナガヤ中に入って語るっていうのもいいんですけど、まちを歩いて町並みを見て、長屋に限らずにまちの面白さを体感する。駄菓子屋に行つて一つ10円のお菓子とか

買って、大喜び。田中さんのところに行くのと和菓子をやって、美味しい和菓子を作っている。

一つのパターンとしてまちあるきはあるかと思います。私たちがモデルにしているオープンハウスロンドンっていうのもまちあるきがあるんです。ハムステッドとか有名ないい住宅地がありましてね、逆に再開発して作ったまちとかね、いろんなタイプのまちをボランティアガイドの人が連れて行ってくれるんです。ですから一つのプログラムとして認められているということです。ですから長屋人と認定いたします。

それで今大体どんな経過で長屋に暮らし、あるいはオープンナガヤに参加してやってこられたかということですが、あと聞き漏らしているのは芸術的なことで言いますと須谷さん何かありますか。アート、音楽とか何かありそうですね。思い出したらお願いします。あとオープンナガヤどうだったか、何があったかという話をしていただいた方もいらっしゃいますし、ちょっとその辺を誰と会ったか、どんなことがあったかちょっとでこぼこありますので一巡したいと思います。須谷さんのところは何人ぐらいましたか。

須谷： 予約制でしたので、1日目は私ずっと詰めていて15名でした。去年よりはちょっと多かったと思います。2日目は私ずっと詰めていなかったんで集計はちょっと分からなくて学生さんがわかると思います。

以前は長屋に住みたいという人や長屋持っているんだけど改修ってどんなものなのかなとか多かったんですが、今年は自分は建築をやっていますという人がいらっしゃって私ところは改修済みの長屋の他に改修していない長屋、というのは4軒連なって、一つ空いても改修するとなると、連なった長屋は連なって耐震補強してもらうんで、1軒空いているところって1軒だけ耐震というのもどうかなと。そのままほってあるのが何軒かありまして、そこをすごく興味深く、これがこうなったんですねとビフォーアフターを実際に自分の足で入って行ってみれるというので建築の方が来られててなるほどなるほどという感じで。私よりはずっとよくご存知の方で、しきりと感心していらっしゃいました。

藤田： 今年建築の関係者が特に増えたのかなあ。ありがとうございます。須谷さん大家さんへのアドバイスがあったと思うんですが、今年もそれはあったんですか。

須谷： そうですね。ここはこういう風にしましたって、私したんじゃないけどこういう風な感じでしたっていうのはお話ししてぜひ自分もしたいというような人が去年まではいらっしゃった。今年はその感じではなかった。

藤田： 野村くん。須谷さんところに突然いきたいと言った人がいたよね。1日目じゃなくて2日目？

野村： 両日いました。

藤田： あの人たちはガイドマップを見ていきたいと思ったのかな。

野村： そうですね。予約有ってこのを見逃していたんだと。

藤田： ああ、見逃していたんだ。そんな方もね。大人気でしたよ。余部さんいかがでしたか。

余部： うちの10~20人ぐらいだったと思います。その期間は私の陶芸の先輩が来ていただいたんですけど、作品展をされていてそのお客さんと混じっていて正確にはよくわからないんですけども。

藤田： 合わせるとどれくらいになるんですか。

余部： 合わせると、先生の作品展もたくさん来られてたんで3日間だけ、通常個展というと1週間近くするんですけど3日間だけだったので、1日にかなりの人数がここに来てました。

藤田： 100人ぐらい。

余部： 100人まではいかないと思うんですけども常にここに。

藤田： 私来た時も10人ぐらいいたかな。

余部： そうですね。同じ状態が入れ替わりでずっと。

藤田： 28日、29日に限って言いますと1日7,80人は来ているかと。

余部： そうですね。ただ先生の作品展に来られた方もいて、その方は作品を見ているんですけど、オープンナガヤで来てはる人は上ばかり見ていて、それで違いがわかります。作品見ないで。

藤田： 上を見ている人は10人、20人ぐらい。

余部： もうちょっと作品を見てあげてよと。

藤田： 余部さんところ来て大喜びしていた人はいっぱいいました。これはすごいと。

鈴木： 野田案内したあとにね、余部邸に行きたいというんですよ。向こうでアンケート一個もポスティングせんと、ここでポスティングする。ちらっときいて、近いんですよという、そしていらいきましょうかと。

余部： 鈴木さんだいたいたくさん連れてきてくれはって。

鈴木： そんなたくさんじゃないけど、ほぼ100%ここまで案内して。余部邸見たいなという人結構多いみたいで。

藤田： ありがとうございます。では河合さん。

河合： だいたい合計で120人ぐらいでした。

はい。うちは離れで展覧会していて、それで80人ぐらい芳名録書いてるんですね。だからメインの方からきてない人も居てるんで100人か120人ぐらいきてると思う。

いつも展覧会やったりして、今回は濱名さんという方が、建築の面格子ばかり、面格子って窓につける鉄で作った模様のあるもの、の展覧会をして、それに面格子オタクみたいな人がいっぱいきて、帰らないんですよ1日中。そんななかで近所の面格子を見て回ったり、だいたい下町に多いものですから。天下茶屋らへんにいっぱいあって。見に行っってはみんなまた上がってきて、ストーブの周り囲んで、そんなので盛り上がって楽しかったんです。

僕は大阪とか中国とかチベットとかのモノクロの写真展と、女の子の大場さんって子がピンホールカメラで撮った写真展をやって、まあそれでだいたい120人ぐらいきてくれて、昔の友達とか知り合いのお子さんとか出会いがあったりして、面白かったです。

遊郭の研究しているという女性もいて、いろいろ面白い話聞かしてもらって、いろいろ出会いがあるなあと思いました。

ちょっとまだ部屋が空いているもんですから、誰か借りたい人が現れたらいいのになと思いつながらだったが、それは空振り、なかなかうまくいけへんもんやなあ。

中田： 世の中にはいろいろな人がいるんですね。

河合： そういう出会いがあるんですね。

藤田： ありがとうございます。吉永さん。

吉永： うちは、時間が朝の10時から夜の10時まで2日間開けていたんですが、野村さんに一回相談した時、皆さん時間どうしているんですかと聞いた時に、一番早い人は10時からで、遅い人は夜の10時までって言われたんで、うちは最初から最後まで開けますっていうことで、2日間10時10時でやったこともあって、最初の日は45人ぐらいで、次の日が60人ぐらいで、

だいたい 100 人ぐらいでした。

面白かったのは、長く開いているんで朝一から回っていく人は、うち平野なんで場所離れたこともあって、朝一で他これから行きますという方と、夜の 9 時半ぐらいにぎりぎり、ここは 10 時までやってると駆け込んで来られた方とか、長いことやっていたおかげでたくさんの方きていただけたかなと思ってます。うちの奥さんも珈琲 80 杯くらい入れたと、疲れてましたけど。いろいろきていただけて。

面白かった人は 9 時半ぐらいに最後駆け込まれた方はここ 9 件目でって方がいて、その方はやたらと聞くことが、廃材処分とかってどうしたんですかと、すごくマニアックなことばかり聞くので、何を考えているんだと思って、最後座ってゆっくり話したら、実は去年オープンナガヤに参加されて長屋って面白いなと気づいて、今年の夏に長屋を買ったんですよ。そしてそれをプロに頼むとかじゃなくて自分でこれからやっていこうと思うんです。いろいろネットとかで調べてコーナンでは木が買える、ここで何々とかで、産廃の出し方がわからないと。オープンナガヤに参加されて、今年 9 軒見て回って、これから自分でやっていこうと、そういう方が出てきたのがすごくこのオープンナガヤって面白いなというところです。

これまで全く長屋なんか興味がなかったらしいですけれども、去年参加して、今年も見て回ってしかも自分でやっていこうという方が出るのが、長屋というのが手頃というか自分でできるというのがありますしすごく安い値段で買われたとも言ってたんで、それも含めて建築の幅を広める可能性があるものだなと思いました。

藤田： オープンナガヤがとても素晴らしいと言って頂いて涙が出ます。やってよかったなど。

吉永： 来年はその方の家がオープンナガヤに参加されるかもわかりませんね。去年長屋に出会って、今年、来年とすごいなと思いました。

藤田： 来年随分、数が増えそうなんですけれど大丈夫かなあと。去年は 18 軒に抑えた。それは限界かなあと。学生を集めてするのも。今年、実行委員会やってみても、ベテランの方が自分たちでもうどんどん企画して、やっていただけるので学生を行ってもらわなくても。そうするとどんどん増やせるなと思いました。

なかなかそれも大変で、頑張って学生をオープンナガヤをやる前に、学生を何十人も私の部屋に集めて、ワークショップをやってくれたりですね、写真の撮り方とか長屋の勉強会とか何回もやってくれた。チラシ作って、すごく立派な、配ったり貼ったりして、まあその話はまた出ますけれども。そういうことで。ありがとうございました。安藤さん。

安藤： 今年は、1 日目が 70 人で、2 日目も同じく 70 人でした。今回はお名前だけ記帳していただいたんで、延べ人数は正確です。1 年目の時、初めて参加した時は、やっぱり 70 人ぐらいずつで、その時は 1 年目は住宅ができたんで住宅を内覧して、コーヒーを出してそれが 70 杯出したんでそれも確実です。住宅を内覧してもらくと、話も結構長くできるんで長屋を所有しててどういう風に活用していこうかと思っているという人の話をよく聴きました。

次の年はペイントのワークショップを企画しまして、その時はペイントに興味があったり長屋を自分たちでなんかしたいという人が結構集まってきました、その時の数字はちょっと覚えてないんですけども。

今年は大体どんな人達が来たかという、まずご近所の方ですね。あと、去年もあ、この人きていたなというリピーターさん。うちのお店は普段開けてなくて、オープンナガヤの時にしか開けてないんですよ。だからお店をみたいと前から行ってらっしゃるお客さんがきてくれた

り、友達関係がきたりしたんですが、面白かったのは今年は住宅の方は内覧せずに工房側だけ開けて、住宅の方は息子の方が友達が自由に出入りしてオープンハウスして、勝手に遊んでたんですけれども。その流れで近所のお友達が初めてお泊まりすることになりまして。これは多分オープンナガヤの居心地のいい、宿泊にまで結びついたんだなあ。すごく深い交流ができてよかったなど。

藤田： ありがとうございます。すごく靴が並んでいる写真がアップされていました。鈴木さん。

鈴木： 私はまちあるきで JR 野田にいて集合ということで、予約なんで人数は限られていまして土曜日は 2 時からのスタートで日曜日が 10 時と 2 時と。3 回ですね。合計 20 名ぐらいだったと思います。

最後に、アンケートを“ななとこ庵”で書いていただいて、ポスティングは余部で。介護施設見たいという方もおられました、施設長にちょっと説明してもらったり。私個人的に写真を持ってまして昔と今という対比で。それをななとこ庵で展示させてもらったんですけど、地元の方は喜んでました。わかるから。参加された人は全く全然、昔もわからないし、今もよくわからないから、ウケは良くなかったんですけど。1 週間、だったけどもうちょっと貼ってほしいという人もいてよかったかなと。

藤田： 今の写真はご自分で撮られた。

鈴木： 昔の写真は 40 年前ですから、資料とか集めたやつをそれと同じパターンで撮って展示した。地元の方には結構よかったみたいです。

藤田： せっかくですので参加された方一言ずつなにか。ご質問でもいいですし長屋についてもいいですし、オープンナガヤについてもいいですのでなにか。中田さん。

中田： 先ほどは冒頭で三安さんが開会されましたけれども、3 月まで UR リンケージにおりまして、今は UR 都市機構というところに出向しております。実はリンケージ在職時に京町家の研究を別でやっております、次のテーマは何かということで、大阪長屋がいいんじゃないかなあと、先生の書物を見て、京町家の次は大阪長屋がおもしろいかなと、一緒にさせていただいております。

私は大阪長屋となんら縁もなかったんですが、物を読んでいると京都は、大きな観光資源の中でスタイルとして物が表に立っているような感じであるかなという印象があり、大阪はなんとなく人が中心で、物はメディアとしてのような、そんな感じを先生の書物から受けました。

質問ですが、長屋に関わっていることで自然と、気が付いたら関わっていたというんじゃないかなと思うんですけど、関わった結果人と人がつながるような、どんどん年々人との関係が深まっていくようなことが起きているんじゃないだろうかと思ってるんです。それにちょっと、思いつかれる方がいらしたら、知り合いが増えましたとか思ってもない方とつながりましたとか。そういう期せずしてネットワークャーになってしまうようなことはあるんじゃないかと勝手に思っているんですがいかがでしょうか。

須谷： 私は全然、おじいさんが建てた物受け継いだだけなので建築のことはあまり知らなかったんですけども、改修の時に、何回か改修現場を見せていただいて、例えば襖の構造であるとか、あといろいろなつくりの構造であるとかを伺うことによって、すごくそういうのが面白い、奥深い物だということがわかるようになると、そういうお話が好きな人がいらっしゃるようで、私は全然そういうことに気づかずに生きてきたんですけども。そういう人とすごく共

感できる気がしました。

私この間、宇宙に行った人の話をテレビでやっていたのを見ていて、その方が、訓練をされるのに、訓練をしていったんだん振り落とされていくんですね。そして最後に宇宙飛行士になる。その番組を見ていた時に、その振り落とされていった人たちも志を同じくする同志だとその方はおっしゃっていて、あ、ほんまやなあと思って。今ここに集まってらっしゃる方たちもそれぞれうまくいかない時もあつたりとかあるけど、志を同じくする同志だなあと共感できることがすごく増えてよかったです。

藤田： 須谷さんの話は面白いでしょ。すごくて。同士ですと。どうでしょう。

鈴木： NHKの番組でしたよね。みました。

本藤： 大阪市立住まい情報センターの本藤と申します。オープンナガヤで皆さんが持って歩いていたマップやフライヤーとかを住まい情報センター等で配架させてもらって、できるだけ多くの方にみていただいています。

今年は特に地図が出るのがいつかと問い合わせされる方がすごく多くて、最初に出すフライヤーに11月初旬、10月中旬からと書かれていたんですが、みんなフライングして取りに来られて、10月中旬と書かれていますがもう出てますか、と。電話で聞いてからお越しいただいたらと思うのですが。せっかくお越しいただいてまだなんですとおこたえするのを何人もの方に対応しました。インターネットがこんなに普及している時代なのになんでみんな先に調べないんだろう、せっかちな方が多いなと思いました。

藤田： 長屋オタクはせっかちな人が多い。

本藤： 今年は特にそういう方が多かったので、楽しみにされている方が多いのかなというのは印象としてありました。あと、大阪市の情報カウンターとして、天王寺と難波と梅田にサービスカウンターがあるんですが、そちらのほうにもマップをこちらからお送りして、だいたい50部ずつくらい配架していました。特に天王寺サービスカウンターが一回送ったマップが全てなくなって、もう一回追加で送って、さらにそれがオープンナガヤ前日に全てなくなりましたと連絡があり、慌てて仕事後に天王寺に届けに行きました。

藤田： 仕事増やしてすみません。

本藤： いえいえ。なので、皆さんよく見られているなど。各店舗さんにはそれぞれマップを置かれていると思うんですけども、なかなかそこまで直接行くことができない方達、一般の方たちがこういう公共施設に取りに来られるのかなと思いました。なかなか重要な位置にあるのかなと思いながら。おそらく中でも取りに来られやすい場所に住まい情報センターはあるので、これからもっと普及していくのには住まい情報センターを使っただけであればと思いました。そして須谷さんと野田まち物語さんのイベントは予約をしていただくのに、住まい・まちづくり・ネットを使っってもらっていたんですが、去年よりも申し込みされている方が多かったのではないかと思いました。

鈴木： 実はね予約がわからないんですよ私のところ。直接、メールで来てくれたのもあったので。一週間前かな、わかるのが。そしてね、個別に一人一人メールで。抽選に外れたと思ってた人もいました。なかなか案内がないので漏れたと思ったらしい。人数締め切りやったかわからないんですが。

本藤： 締め切りとか一応書いてはいるんですけども、皆さんちゃんと見ていない。結構勝手に早とちりされる方がとても多くて、よく文章を見ていないというか。

鈴木： だからと言って、逐一いただくのも大変やと思うんでしゃあないところはあると思うんですけども。

藤田： なんなんだ。長屋ファンはせっかちではやとちりだと。ガイドマップどうでした。はけましたか。

鈴木： はけました。

藤田： できたのは10月の頭だったよね。去年が11月の初めかな。今年がんばってすごくいいやつを早く作ったんですね。とにかく学生諸君には頭が上がらない。小池先生は最後までめに。

三安さんには島やんでお会いしましたね。空掘の居酒屋の。1日目晩御飯食べに行ったらお会いしました。

三安： そうですね。その前に空掘の guild house ですか。あちらの六波羅さんのほうで長屋を見させてもらって、彼の方はあちこちしてて、別の場所で木造の長屋を新築の平成長屋という感じでコンクリートの建築物と木造との対比が非常に興味深かった。その辺のところから腰がもう限界で、先生にお会いしたのがへろへろの時です。2日目に野田まちあるきということで鈴木さんのところに行くつもりだったんですが。

藤田： それで豊崎の大家さんが語る会に誘ったんですけども行けませんと。安藤さん。

安藤英寿： クラニズムの安藤です。だいたい妻の方で言ったことで。思いがけずオープンナガヤを通して泊まりに来るような子供とか、うちの子供もすごく喜んでますし多分周りの近所の方もびっくりしてたと思うんですね。初めてお泊まりするというので泣きもせず。うちはかなり手を入れてしまった長屋なんで、なんじゃこりゃというような作りになっているので、そういうのも子供ながらに通じるところがあるんだなど。

あと今回のオープンナガヤは手持ちの家具とか蚤の市みたいな感覚で販売というか見てもらっていたんですけどそういうのもとりあえず関心がある人に。古い長屋好きな方というのは、古い家具にも興味があることが多いので、そういうのも抱き合わせていろんなイベントをしていこうかなと思っています。

河合雅代： アトリエとして借りてくれている方たちがこのオープンナガヤの日をすごく楽しみにしてまして。今回個人的に、面格子とか研究している方にまちあるきとかトークショーをやってもらって、本当にただのサラリーマンの方なんですけれども、すごく嬉々としてトークショーやって、スライドショーやって。意外とみんな自分で研究していることを発表する場みたいなのがみんな欲しがっているんだなど。ということでオープンナガヤの機会があれば誰かにそういうことを頼んで、そういう表現をしてもらえたらなど。

藤田： 自己実現の場になる。

河合： そうですね。お客さんも来られて。

藤田： ちょっと注意しないといけないのは、アートとかそういうのを前面に出すと建物の良さが後ろに行っちゃってですね、その辺を調和というか。うまく空間を使うというのがなかなか難しくて大事かなと。まあいろんな評価いただきまして私も本当に嬉しいです。一番後ろにいるみなさん、オープンナガヤに関してはいろいろな思いがあって沢山しゃべれるだろうけれども。前におられる方に質問とか聞いて感想とか。一言お願いします。野村くん。

野村： オープンナガヤのことになるんですけど当日、僕は今年度から参加してくれた会場を中心に回ってて、あとはオープンナガヤ事務局の電話番をしていて、その中で今何々神社にいるんだけど会場にどうやっていったらいいとか。ちょっと僕もわからないんですけども。

ということでオープンナガヤ当日のトラブルというか、アンケートにも書いていただいているとは思いますが、トラブルであったりアンケートには書きにくかった事務局に対する厳しいご意見を来年のためにお願いしたいと思うんですけれども。いかがでしょうか。

鈴木： まちあるきで最後回収3時半とかにアンケート回収しはったんですよ。アンケート書けなかったんですよ。慌てて、駅に誰か走ってもらって戻ってもらったんですけども。すごい純粹やなど。3時半に予定は到着ですけれども、そこでアンケート書かなあかんけれども3時半に回収して。我々まちあるきは時間きっちりではないので、3時40分ぐらいになったんですけども、3時半にはアンケート書く用紙がなかった。今回回収したところですよ。わかりますか。学生は3時半に回収せえと上から言われたんでしょうけれども、アンケート意味ないわな。書いてから回収せなあかんの、白紙を回収されたんですよ。慌ててななどこ庵の職員に走ってもらったんですよ。今出たところですよ。戻ってきてくれたけど、3時半に回収せえと言われたということだったんですけれども。そこで初めてアンケート書いてもらって、ポストは持って帰ってもらったんですよ。最後は余部さんところでポストイングするんで。これ学生責めているわけではないんですよ。

まちあるきはやっぱり難しいわね。1時間40分になるときもあるし、私も早く着けばよかったんやろうけど、ちょっと難しい。きっちししてなかったのかもわからんな。3時半に来てください、そこでアンケート回収と。ちょっと考えてもらったら、ななどこ庵の人にも言っておけばよかったんやね。着いてからアンケート書いて回収してと。その職員も持って帰ったんですよと。ええっと。まだ書いてないのに取りに行ってもらいました。

藤田： アンケートとは何か。毎回非常にいろんなご指摘をいただいて、一昨年はガイドマップは散々言われましてね、いろんなこと言われて本当にその通りでね。ですから是非来年に向けて。今年、アンケートはこの方式よかったですよ。最後のところで投函してくださいって。あれも学生諸君が考えてくれまして。毎年少しずつオープンナガヤは成長しております。よろしいですか。白石さん。

白石： 小池研究室の白石です。学生として長屋に関わってきた感想ですけど、いろんな方の話を聞いているとその方の魅力、その方の暮らし方の魅力、つながりの魅力が見えてきてすごく興味深いと思います。最初は、研究室で改修した長屋がかっこいいなと思ったのがきっかけだったんですけれども、建築的な部分から、今はそこに住んでいらっしゃる方の暮らし方とかにすごく興味があります。これからもそのような研究をしていきたいなと思っています。

藤田： 長屋人に相当するような人に随分お話を聞いて、修論をね。もうできました？では、上野くん。野村くんと一緒に頑張ってくれました。いろんなものを作ってくれました。

上野： 一つ質問があります。僕も白石さんと一緒に、暮らし方というのが本当はもっと面白いんじゃないかなと思っていて、昔大阪に長屋の建物がたくさんあって、大阪の文化とか暮らしぶりというものの器が長屋だったんじゃないかなと思っていて、オープンナガヤに参加している新しい住まい方を実践している方たち以外にも昔から住んでいる人たちの受け継いできて、でもその人たちは昔からやっていることを受け継いでいる文化だから、気づいていないような大阪の文化みたいなものをもっと知りたいなと思うんですけれども、どういう風にしたらそういう風な情報を聞き出せるかなというのをお聞きしたい。須谷さんところだったら昔から住んでいる人もいますのでお話を聞くこともできるかなと思うんですけれども。

須谷： 本当に戦前からいらっしゃる方もまだいらっしゃるんですね。そういう方たちがだんだ

ん高齢になって動きが辛くなってきたりと。町のお祭りだとかあるんです。町の運動会もあるんです。小学校の運動会以外に、町内対抗のリレーとか。すごい燃え上がるようなんですけれども。そういうのに、住んでいる学生さん、今は学生じゃないけれども、住んでいる人が誘ってもらったりするようなんです。神輿いっしょに担いで欲しいとか。

そういうのって挨拶がすごく重要で。挨拶がいいと周りの方がおっしゃるんですね。若い人珍しいですし嬉しいらしくてお年寄りの方がおっしゃるんですよ。うるさくしていませんかって、私は気になるんですね。毎週毎週宴会やっているみたいなんで、迷惑かけてないですかって言うんですけれども、そんなことない、活気があって、今まで本当にほったらかしの長屋だったんで真っ暗で怖かったし犯罪があったら怖いしと置いていたところに明かりが灯って若い人の笑い声もして、お祭りにどうぞと誘ってもらって女の子たちは浴衣を着ていくんですね。だからすごいその町に溶け込んでくれたり。質問なんでしたっけ。そんな感じで、やっぱりご挨拶が交流を作るんじゃないかなって。

藤田： よろしいですか。ちょっと難しい質問だなと思ったんですけれども。そんな感じで。新旧老若男女のまじわり、その中で文化がどういう風に継承されていくかという感じで良かったと思います。生き返るのは建物だけじゃなくて町も生き返るんですね。お年寄りも生き返るといふ。他の方はどうですか。吉永さんでしたっけ。隣に住んでくれるだけで安心だっているのは。

吉永： 暮らしぶりの文化というのは、長屋っていうのは昔は作りも同じものが繰り返してましたし、家族構成も多分おじいさんおばあさんがいてお父さんお母さんがいて子供がいて、大家族とみんなが同じ形式の家に住んでいたから音のことも気にならないし、挨拶とかも、みんながみんな繋がってるし、間取りも同じで、そういう関係があったと思うんですけれども、それがたぶんよく今高齢化していたり、歯抜けになっていたり5軒に1軒が空き家とか言われてるなかですごく問題になってきているかと思うんですよ。

その中で、新しい人が入っても問題が起こる。生活のリズムが違ったりと、お年寄りの人の横に若い人が入っても結局問題になってしまったりとかあるかなと。そのなかでそれを私は面白おかしく解決していければなと思うんですけれども。違いが出てくるとは思うが、違いを楽しめるように。それまで暗くて空き家みたいなところが町のコミュニティの一つの特徴になったりとか、前から住んでおられるお年寄りの方がまた元気になる。そういう、間取りも含めて違いも出てきてると思うんですけれども、世代間の違いも。それが逆に新しい交流になっていったら、これからの暮らしぶりとか、長屋っていう新しい文化が繋がっていくんじゃないかなと。違いを楽しめるような長屋づくりをしていくことが重要なと。

私自身がそうで、隣の一人暮らしのおばあさん83歳のおばあさんが住んでおられて、隣が空き家なんで不安なんで誰か住む人いませんかということで、私住み始めさせてもらったんですけれども。私なんて何のおばあさんの面倒見ているわけでもないのに、住んでいるだけで安心感与えているなんてワンルームマンションとか逆に隣静かな方が嬉しいっていうぐらいなのに、そう言われたことが私住み始めたきっかけです。それは長屋の壁一つとの関係が持つてる、デメリットでもあると思うんですけれども、一体感というか運命共同体的なところも長屋っていうのはあるのかなと思います。

余部： 今ここに集まっていらっしゃる長屋に暮らしていらっしゃる皆さんはすごくうまくいっている方が集まっています。残ってる長屋のほとんどは問題を抱えているところだ

と思うんで、ここに集まっている方は幸せ。うちも長屋はあるんですけどもそういう楽しいことばかりではなくて。なかにはちょっと問題のある方がいるというのがほとんどで、それと私は大家になるわけですけども。そこまでコミュニティと言えるのかなと。

大家と店子との関係というのがやはり大きいので。問題がいっぱいある方が多いんじゃないかなと。私も文化大事にしたいんで、生活文化見せたいですし、ここも建物だけじゃなくて生活文化があつてこそその建物。そういうことも大事だと思うんですけども、きれいごとだけじゃないということを長屋を研究するには違うということもわかってほしい。

藤田： おっしゃる通りだと思うんですね。大阪長屋の保全と活用ということでやっているわけですけども、私も全て保全活用できるとは思っていませんし、全てやるべきだと思いません。優先順位とかですね、ここは防災上はとか。そういうところがかかなりある。最初だから、黙っていると、え、これも壊したのとなっちゃうんですね。そこをなんとか。外から見ただけで残す価値がある長屋さえもあつという間に壊されるというのをずっと見ていて。

ここだけの話、豊崎の長屋は外から見ただけでは残す価値があるとは思わなかった。なかに入ってみて畳がぶよぶよで2階に上がると揺れて、これ大丈夫ですかと、私が言ったら、建築家の竹原先生が大丈夫ですと。本当に大丈夫になって、ビシッとなりまして。つまり外から見てもなかから見ても価値のないだろうと思っている長屋も再生できるんです。それをみんなに知ってもらいたい。あとは大家さんの状況、経済的な状況とか、その後どうなっていくのか。本当にプライバシーに入ったようなところでこの長屋は保全活用する可能性を持っているのかそこまできかないとわからないというのがあります。

余部： 経済的なところが大きい。

藤田： ええ。経済的なところがほとんどです。おっしゃる通りです。ただ、不動産屋さんに関わっていただいたんですけども、小山さんが言うには町に宝物である、大阪の宝物である、阿倍野区の長屋を再生して、そこにいい人、ちゃんとやっていける人、センスのいい人に入ってもらったらその町の価値が上がる。そういう人は繋がっていくとエリアの価値が上がる。町の価値が上がる。大家さんとしてはですね、そういう入り方をしてくると、そして小山さんは選びます。ただ単に売ればいい、貸せばいいではなくて、この人なら貸してもいいと不動産屋さんが選ぶんです、店子を。すると大家さんは安心できるんです。トラブルが起こらない。何かあっても一緒になってくれたり、そういう入り方のところからしていくことによって、大家と店子の関係は良くなります。断言します。無責任ですけども。人間関係というのはいつ壊れるかわからないものなんで、いいことだけではありません。

須谷： 時代もあると思いますよ。バブルのどどんんいっている時って、地価が上がりますでしょ。そしたら住んでいる人たちが居住権というのを考え出して、そうするとお金が絡むとギクシャクして私の父の代はちょうどそういう時でしたので、家賃の値上げをしようとしても、店子さんが結集して、説明会に來いというわけですね。そしたら父が出向いて行って、みんな睨みつけているところで、どうして、経済状況はどうであるとかどうして値上げしなければいけないのかと理由とか税金のことであるとか、そういうことを話しなくちゃいけないという対立の感じになるんですね。今はそういうのは落ち着いてきて、いいというところもありますけど。

余部： 今もありますよ。

藤田： 大変ご苦労をね。いろいろお話をお伺いしたいんですがそろそろ時間になってきました。

和田(康由)先生、大阪長屋について一言。

和田(康)： 今最後におっしゃってた店子さんと家主さんのいろんな関係が難しいと。僕調査してましたらいろいろありまして、貸家協会と借り地貸家協会というのがあって、もちろん対立はしているみたいで。僕も調査してましたら、当時なんでいろんな苦情は聞き流しているんですけども止まると調査できないんで。

戦前の社会部報告もほとんど争議、争いごとが載っていましてね、戦前も戦後もずっと永遠に続くような難しい問題なんですけれども。僕の経験したところだったら、値上げで家主さんから提案した時に、店子さんは政党に頼んでその評価と値上げの値段が一緒だったというオチがあるんですけども、そういう難しいこと考えずに店子さんとは落語に出てくるようないい関係であれば、お互いの人間関係がうまくいってればいいんですけども。ギクシャクしているとその辺が難しいですよ。

私もいろんな保存の話も、うまくいっているところならばそういう提案もしていただいていたんですけども、なかなか難しい。いい長屋もそういう意味ではたくさん解体されたり。この前小池先生と見に行かせていただいた、有形文化財になった長屋が今の豊崎と寺西さんとと、あともう一つ昔の東区龍造寺町にあります。

藤田： 阿倍野区の佐野家住宅もですね。

和田(康)： 阿倍野は寺西さんところですね。あと龍造寺町は昔の東区ですね。明治の一応 40年代とおっしゃってるんですけども。かなり店子さんもわりと外観も綺麗にしながら残してて、外部はだいぶ変わっているところもあるんですけども。そういう風に人間関係がうまくいってればいいんですけども。その辺が難しいですよ。

藤田： 和田先生は大阪の長屋について毎日見て歩いている。何十年も研究されている詳しい方です。どこそこの長屋というとパッと。最後に唯一オープンナガヤを見れなかった川上さん。

川上： UR リンケージの川上です。見ての通り、オープンナガヤの直前に左足を骨折してしましまして、参加できなくて本当に残念でした。特に野田まち物語さんは申し込ませていただいたのに、申し訳ありませんでした。

今、皆さんのお話をお聞きした感想ですが、コミュニティが自然にできていくというお話をされていましたが、高齢者の方が住んでいるところに長屋の雰囲気好きな若い人が入ってきて、そのなかで形成されて広がっていくのかと。そういう力が長屋というか町の雰囲気にそういうのがあると思いました。その一方で私の仕事の関係ではURの古い団地の再生が大きな課題になっているんですけどもそこで、再生というのはコミュニティの再生というのが課題になっている。長屋という横に広がっているのと、団地の縦に広がっているの、そういったところでなぜコミュにニティの再生がうまくいかないのかなあと課題なんですけれども。その解答のどこかがみなさんと研究を進めていくなかで見つけられたらいいなと思っております。

藤田： ありがとうございます。時間がきましたので最後小池先生。

小池： 私は別件があってオープンナガヤ自体は最終日しか行けなくて、SNSなどで拝見していたが、今年終わってから学校で聞くと学生がすごく楽しかったと言っていて、前4回はどちらかという疲労感があったり、いろいろ苦労した話を聞くことがあったんですけども、今年は長屋の魅力を感じたり新しい世界が広がったりしていたみたいで、それは多分実行委員会の学生のサポートもありつつみなさんのおかげそういう場ができてきているのかなと思います。

あと、もう一つは今年会場もどっと増えたんですけどもいつもは賃貸の長屋しかオープン

してなかったんですけども、分譲の長屋が2つオープンしていて、そこまでアピールはできていないが、長屋を買ってこういう風に住むって例が2つあって。そういうのも知ってもらって、35年ローンで家を建てるじゃない選択肢の一つが長屋を購入することにつながればいいなと思っています。

藤田： オープンナガヤやってきたんですけども、社会実験的なものとして大阪市大の豊崎を中心としてモデルの普及させるというのがあるんですけども、それぞれの方にはそれぞれのミッション、思いがあってそれを緩やかにつなげるという思いでやってきました。

教育ということと言えますと、特に後ろにいる上野くんとか野村くんとか、あと小池研究室の春口くんとかが頑張っていて、びっくりするようなガイドマップを作ってくれまして、あと上野くんはプロモーションビデオを作ってそれも非常にドラマのようなみんなこう、俳優のような感じで。吉永さん出たかったんですよ。隣のおばあさんは出てた。そんなようなことで、あと学生諸君頑張っていて、使われてやらされているんじゃなくて、自分たちで主体的にできるようにワークショップを。私は何にも言っていないのに上野くんとかですね、すごくやってくれたんですよ。

一番いい教育は教師が学生から教えられることなんです。こんなことすると、教師が自分ができもしないようなことを学生がどんどん勝手にやって見て感心する。それが一番いい教育です。上から教師がこここうしなさいというのが最悪の教育でね。一緒に作っていくという中で学ぶことができた。教育として、このオープンナガヤが非常に私の中ではやってよかったというのをまとめとします。ありがとうございました。



以 上

4. 長屋入居者の暮らしぶり

今回の調査では、本章1節で詳しく紹介した3事例を含め、10年以内（2005年以降）に大阪長屋に新たに入居した事例14事例の調査を行った。本節では、これらの事例から、近年の大阪長屋の活用の特徴について分析する。調査対象一覧を表II-3-1に示す。

(1) 入居者像

今回の調査対象は、併用住宅として長屋を活用している事例が最も多く10例、専用住宅が2例、店舗のみが2例であった。所有関係では専用住宅の2例のみが持家を購入しており、それ以外はすべて賃貸である。逆に言うと、今回の調査対象では、賃貸の専用住宅はなかったということであり、近年新たに長屋を賃貸で利用する人の多くは、店舗や工房等を展開する場としてより長屋に魅力を見いだしていることが示唆される。

入居者の年齢は、NPO法人が賃貸している事例nをのぞく13例のうち、30代が9例、40代が4例と、すべて30-40代の世代であり、多くが、家族形成に伴い、あるいは仕事の独立や起業に伴い、長屋に入居している。家族構成をみると、単身者が3例、夫婦（または男女同居）が3例、夫婦と子が5例、本人と母が1例と様々だが、家族で住んでいる事例が多いことが分かる。

(2) 入居の経緯

彼らがどのようにして長屋という物件にたどり着いたのかを見ると、不動産業者を通じてという人は半数の7例あったが、一般の不動産サイトからは3例のみ（うち2例は購入物件）で、のこりの4例は同じ丸順不動産を介していた。丸順不動産は一般の不動産流通に乗りにくい古い長屋等償却済み物件の活用を通じて地域の価値を高めるというまちづくり的な視点を重視していることで有名な不動産業者であり、この4例は丸順不動産のブログやSNSから情報を得て入居を決めていた。あとの半数については、長屋所有者が個人的な知り合いであったり、知人を介在し

表II-3-1 調査対象一覧

事例番号	所在地	住宅種別	所有関係	入居者年齢/性別 (取材対象者)	長屋で行われている営業、活動	家族構成	入居年
事例 a	阿倍野区	併用住宅	賃貸	40代/女性	お直し屋経営	単身	2012年
事例 b	阿倍野区	併用住宅	賃貸	30代/男性	飲食店(ランチ、夜はバー)、着物販売	単身	2011年
事例 c	阿倍野区	併用住宅	賃貸	40代/女性	飲食店(カフェ)、グラフィックデザイン	夫婦と子1人	2014年
事例 d	阿倍野区	併用住宅	賃貸	30代/男性	設計事務所、飲食店(ごはんや)、カステラ製造販売	夫婦、子2人	2012年
事例 e	住吉区	併用住宅	賃貸	30代/女性	設計事務所・家具制作	夫婦、子1人	2013年
事例 f	北区	併用住宅	賃貸	30代/男性	グラフィックデザイン・音楽ユニット	男女同居	2014年
事例 g	平野区	併用住宅	賃貸	30代/男性	設計事務所	夫婦	2014年
事例 h	住之江区	併用住宅	賃貸	40代/女性	着付け教室、図書館	本人と母	2007年
事例 i	阿倍野区	併用住宅	賃貸	40代/男性	飲食店(弁当屋)	夫婦と子2人	2007年
事例 j	中央区	併用住宅	賃貸	30代/男性	整体院	単身	2014年
事例 k	城東区	専用住宅	持家	30代/男性		夫婦と子1人	2015年
事例 l	北区	専用住宅	持家	30代/男性		夫婦	2014年
事例 m	住吉区	店舗のみ	賃貸	30代/男性	飲食店(カフェ)、リフォーム、盆栽	—	2012年
事例 n	北区	店舗のみ	賃貸	NPO法人	障害者による織物制作、織物教室	—	2011

て契約に至っていた。すなわち、特に長屋の賃貸物件は、一般の不動産流通にのっているものは少なく、個人的ネットワークのなかで情報を得ているのが実態であることが分かる。

長屋を選んだ理由（複数回答）の分布を図 II-3-1 に示す。最も多くの人があげたのは家賃や価格の安さである。購入した2事例については、古くて老朽化していることから格安で購入し、場合によっては購入費以上の改修費をかけた大規模な改修によって魅力的な住宅に再生するという選択をしている。賃貸の場合の家賃についても、物件が古いことに加えて、家屋の改修費を入居者が負担する場合は家賃が安くなる傾向があり、予算内で併用住宅としても使える広さの物件として選ばれている。次に多いのは立地で10例ある。特徴的なのは、これまでの居住圏や仕事に関わる生活圏に応じて一定のエリア内で探したという人は多いが、特に交通の便がよい都心に集中しているわけではないことである。実際、長屋の所在地は大阪市内の各区に散らばっており、長屋活用は、立地にかかわらずその可能性があると思われる。もう一つの重要な選択理由は、自由に改修できることである（9例）。詳しくは次項で述べるが、多くの入居者が費用を負担し、場合によっては自ら改修作業を行い、魅力的な長屋の空間再生を果たしている。築年数が長いから、古くなり改修が必要な状態であることがほとんどであるが、その改修を自らの好みにあわせて行えること、また改修可能な木造長屋の柔軟性が重要な選択理由になっている。一方で、最初から長屋を探していた事例は1例のみである。古いものが好き、長屋の雰囲気が気に入った（9例）、という志向性はベースにありながらも、特に長屋に絞って探していたわけではなく、手頃な費用で一定の広さがあり、自由に改装できる物件を探していたら長屋にたどり着いたという人が多い。「お金がなかったので、改修可能で一般流通にのっていないジャンク物件を探した」という人もいた。

(3) 賃貸契約

賃貸物件である12例について、考察する。すべて普通借家契約であり、定期借家契約はなかった。家賃は、月額8万円前後が多く、7.5万円～8.5万円の範囲に7例が集中している（図 II-3-2）。最も高いもので12万円、最も安いのは2万円であった。2万円の事例は個人的な知人から借りており、長年空き家になっていた物件を改修費はすべて入居者負担で借りたものであった。

(4) 改修費の負担タイプ

長屋の選択理由として、自由に改修できることをあげた人が多いことは前述したが、改修費を家主である長屋所有者と入居者がどのように負担したかを見ると、3つのタイプ、すなわち、改

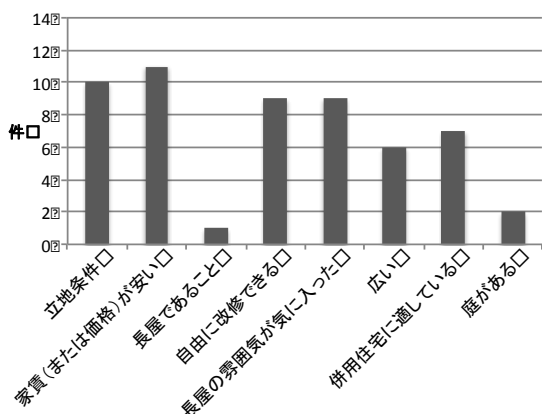


図 II-3-1 長屋を選択した理由（複数回答） n=14

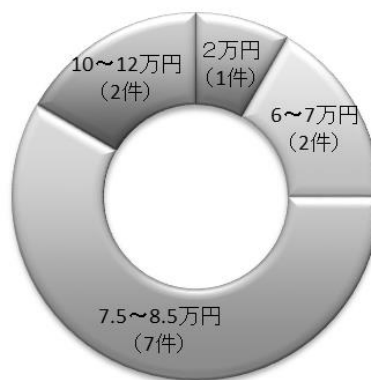


図 II-3-2 長屋の月額家賃 n=12

修費用所有者負担型、改修費用折半型、改修費用入居者負担型に分けることができる。その分布を図 II-3-3 に示す。この図からも明らかなように、所有者負担で改修した上で賃貸に出すという一般的な型である改修費用所有者負担型は 1 例だけであり、改修費用折半型が 6 例、改修費用所有者負担型が 5 例という結果であった。改修費用折半型では、基本的な構造や水回りを所有者が負担し、内装については入居者が負担するといった事例が多い。物件を賃貸するにあたっては最低限住める状態に整えることは所有者の責任でもあり、それ以上の改修は入居者が負担するという線引きにより、個々の入居者のライフスタイルと好みに合わせた魅力的な居住空間が実現しているタイプである。一方、改修費用入居者負担型は、空き家で放置されていた長屋等において、家主に改修費を負担する意志や経済的余裕がない場合に採用されている。個人的なつながりで契約している事例が多く、家賃はその分安価に設定されているのが特徴である。入居者側に、一定の建築的知識や専門技術者との繋がりが求められるが、不動産流通にのっていない物件の活用においては、こうした方法も一つの選択肢となっていることが分かった。

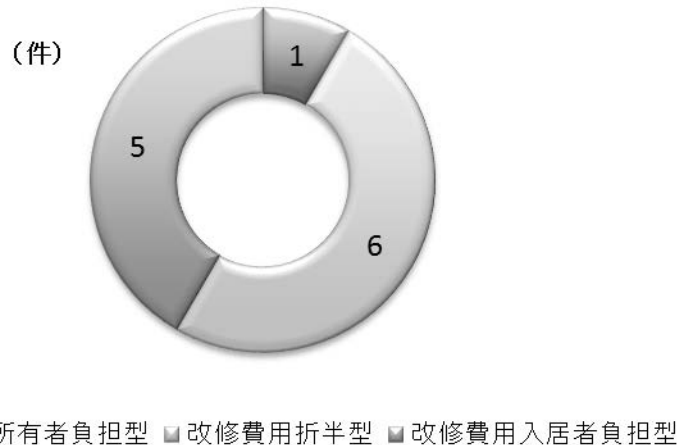


図 II-3-3 賃貸長屋の改修費負担の型 n=12

表 II-3-2 性能向上に関わる改修の有無 n=12

事例番号	設備	構造		
	設備更新	耐震補強	壁除去	柱壁付加
事例 a	●			
事例 b	●			
事例 c	●		●	●
事例 d	●			●
事例 e	●			●
事例 f	●	●		●
事例 g	●			
事例 h	●			
事例 i	●		●	●
事例 j	●			●
事例 k	●	●		●
事例 l	●	●		●
事例 m	●		●	●
事例 n	●	●	●	●

(5) 住宅改修

長屋への入居にあたっては、設備、内装の更新を中心に、一定規模の改修が行われていた。改修費用について、今回は入居者へのヒアリング調査であったため大家負担分の詳細は不明である。入居者が負担した改修費用をみると、改修費用入居者負担型では、200～400 万円程度が中心である。事例 g のみ 75 万円と安いのが、これは建築専門家である入居者本人と仲間による DIY で、廃材等を利用して改修したため、一部材料費のみの費用となっているためである。改修費用折半型では、自己負担での改修は、照明、建具、棚の設置等で 150 万円程度のところと、内装を大規模に改修し 300 万円～

750万円かけているところがある。一方、購入した2例においては、いずれも800万円程度をかけて大規模に改修している。

住宅の設備、及び構造に関わる改修の有無についての一覧を表II-3-2に示す。設備の更新はすべての事例で行われている一方で、耐震補強が実施されているのは4例だけである。この4例のうち2例は購入事例であり、賃貸で耐震補強がされた2例は、所有者負担により耐震改修が実施されている。購入物件である事例kと賃貸物件である事例f、nでは、限界耐力計算に基づいた耐震改修が行われた。賃貸物件においては、入居者が負担して耐震改修が実施されている事例はなく、賃貸人が耐震に関わるコストを負担するのは困難であることが伺われる。賃貸物件の本格的な耐震改修をだれの負担でどのように行うかは重要な今後の課題である。

一方、耐震性能を低下させる柱の除去は見られず、壁の除去を行っている事例は4例あったが、これらは同時に壁の付加も行っており、全体の傾向としては無理な除去はなかった。これらも含め、14例中10例については、柱や壁の付加による耐震性能の向上になりうる改修がされていた。

内装については、全体に長屋の既存の要素を可能な限り活用する傾向が強く、長屋らしさを残しながら部分的に新しい要素を付加していた。しかし、既存の壁や天井の状態で見ると、これらを新しい仕上げで覆ってしまう「仕様一新改修」も一部見られ、今回の調査対象では購入物件の2例が該当した。これらの事例では、改修時に建物を一度スケルトン状態にして仕様を大幅に変更していた。既存の柱や壁、床や天井をそのまま残し、長屋の間取りや空間特性を活かした「既存活用改修」は6例あった。いずれも土壁を塗り直すなど痛んだところだけ手を入れて、よい状態で残っている既存真壁や既存天井の材を活かしている。また既存の庭を美しく整え、内部空間から庭へつながる長屋独自の空間を継承しているところも共通している。真壁を大壁に変更する、外装を新しくするなど仕様を変更する改修を行いつつも、一部既存の材を活用している場合を「既存一部活用改修」と分類すると、5件が該当する。壁はすべて大壁に変更されているが、天井については既存の天井表わしを活かしているものも見られ、また既存の柱位置を変更せず既存の空間構成を活かす等の工夫がみられた。なお床については、これらの型にかかわらず、すべて張り替えが行われ、多くはフローリングに変更されている。畳は寝室等ごく一部にしか残っていなかった。

(6) 複数の活動の場となっている長屋空間

長屋における暮らし方の最大の特徴は、住むだけでなく飲食店、事務所、制作販売等、様々な活動が長屋の空間を利用して行われていることである。表II-3-3は、専用住宅2事例を除く12例について、活動内容と数を示したものである。主な業種についてみると、飲食店が5、制作販売が3、事務所が4、サービス業2となる(事例d、mについては主な業種が2つ)。特徴的なのは、多くの長屋においてこれら主な業種以外にも様々な活動が行われていることである。カフェを経営しながらグラフィックデザイナーとしても仕事を受け、さらにぬいぐるみの制作販売をしている人、設計事務所を主宰しながら会津木綿を使った雑貨を制作販売している人、飲食店経営と不動産を掛け持ちし、さらに裏庭で盆栽を育てて販売している人など、ひとりで複数の仕事あるいはサブワークをしている人が多い。

さらに、同居家族のみならず、別に住んでいる親や兄弟も、長屋空間の一部を利用して何らかの活動をしている事例も少なくない。事例bでは、夜のバーを息子が経営しているところに、母親が毎日通ってランチの営業をし、収益はそれぞれ別に得ている。さらに表の間には妹が着物を

販売する店舗がある。また事例 d は、夫は離れを事務所にして設計事務所を主宰しており、妻は食堂を営んでいる。カフェ空間である表の土間は夫の打ち合わせ空間としても使われる。さらに別に暮らしている母親のカステラ工房もあり、母親は毎日通ってきてカステラを焼き、店先で販売している。長屋で行われている活動の数が単一であるのは 1 事例のみで、2～4 の活動が行われており、平均は 2.75 であった。

このように、長屋居住者の多くはデュアルワークを行い、かつ長屋空間は、複数の主体のシェアワークの場ともなっている。

表 II-3-3 長屋で行われている仕事・活動

調査長屋	取材対象者	家族、その他	長屋で行われている活動数
事例 a	制作・教室		2
事例 b	バー(夜間)	物品販売(妹)/手作り品販売・ランチ営業(母)	4
事例 c	カフェ・グラフィックデザイナー・ 雑貨制作	カフェ(取材対象者と共同)/雑貨販売(弟)	4
事例 d	設計事務所主催	食堂経営(妻)/菓子制作販売(母)	3
事例 e	設計事務所主催・雑貨制作	家具製作・内装施工(夫)	4
事例 f	グラフィックデザイナー・ イラストレーター・音楽活動	音楽活動(同居人)	3
事例 g	設計事務所主催・ 創作活動		2
事例 h	着付け教室・ワークショップ主催		2
事例 i	飲食店・弁当デリバリー		2
事例 j	整体院		1
事例 m	カフェ経営、不動産、盆栽	ランチ(母)	4
事例 n	制作、教室		2